

東洋大学文芸“綴”
サークル



2014年

秋



aje⁸

東洋大学文芸サークル

“**双**”
双

2014年 秋季号

目次

終わりゆく夏の狭間で
草津出

5

うととみ
under *ander Dämmer*
星井 靄

26

それも、ひとつの
儚桐深花

49

指先ノスタルジア
鏡上 怜

57

ajo → 綴

終わるゆく夏の狭間で

草津出

私は一度だけ小さく深呼吸をして、そのチャイムに手を触れた。指先がそこに行きつくまでに、一体どれだけの時間を費やしたのだらう。小学校の頃から続いているこの習慣。だけどこの行為だけは、幾らやっても慣れそうにない。

指に力を入れるその時も、緊張のせいか感触はまるで感じられない。熱に浮かされた感覚はまるで夢を見ているようだ。

家の中から声がした。それは、幼馴染の陽ちゃんのお母さんのものだった。ただ聞いただけで分かってしまうくらい、聞き慣れてしまったその声。だけどその声を聞いた瞬間、私の心臓は、全身に血液を一斉に送り始める。私はほんのり汗ばんだ手で持っていたお弁当の包みを握りしめた。

幼馴染の陽ちゃんを朝起こしに行くという行動は、いつしか私の日課になっていた。陽ちゃんは私が迎えに行かないと起きようとしなない。それを朝が弱いせいだというけれど、本当はただの建前だということを、私は知っていた。

私が起こしに行かなくても、おそらく陽ちゃんは自分で起きて

しまうだろう。陽ちゃんはただ、私が毎朝起こしに来るという状況をそのまま受け止めているだけなのだ。お弁当にしてもそう。多分陽ちゃんにはこのチャイムの音色も、お弁当の温もりさえも伝わってはいないのだ。だけど私はそれを自分のほうからやめるつもりはなかった。それは、私のほんの細やかな抵抗だった。

不意に私の手の甲に、小さな欠片のようなものが乗った。桜の花びらよりも薄く軽いそれは、陽の光をうけて淡く七色に輝いていた。けれどその欠片は手に取ろうとすると、途端にほろほろと崩れ落ちてしまう。

私は振り返った。町のいたるところでここ数日、その七色の欠片は空を舞っていた。この家の前にも、少し進んだところにある寂れた商店街の通路にも。そしてもちろん、毎日を陽ちゃんとふたりで歩く通学路にも。それはあまりにも脆く儂くて、身体にぶつかっても殆ど気付くことはないほど小さなものだ。でも私にはそこに本当にあるのかも分からないそれが、なにか大切なもののような気がしてならなかった。

私が通された部屋のベッドの上で、陽ちゃんはいつものように丸まったダンゴムシみたいな姿で眠っていた。それを見た私は、いつものように陽ちゃんを起こす。

「陽ちゃん、朝だよ！」

そう、いつものように。

来年受験を控えている私たちは、いつか異なる進路のもとに離ればなれになってしまうのだろう。だけど、それが例え夢であったとしても、私はこの日常が変わらないものであつて欲しいと、そう、いつまでも心の中で願っていた。

これから夏の本番を迎える街じゅうが、蝉の鳴き声で満たされていた。ジリジリと地面を焦がすように鳴き続ける蝉の声は、心なしか一帯の気温を上昇させているようだった。その中で欠片がまるで雪のように降り注ぐ光景は、どこか、現実感のない空想のように感じられてしまう。

まだ寝足りなかったのか、陽ちゃんが大きな口を開けて欠伸をしている。欠片が口の中に吸い込まれてしまわないか少し心配だったけど、陽ちゃんは気にしていないようだった。

お弁当を差し出された陽ちゃんは、それを、さも当然かのよう受け取った。それを見た私は少しムツとしてしまう。

たまにはありがたいのひとつくらい、言ってくれても良いのに。陽ちゃんにとっては私がお弁当を作つてこようがそうでなかる

うが、きっと些細な出来事でしかないのだろう。しかしその些細な出来事が、私の中にもやを作り出すのだということ、はたして陽ちゃんは知っているのだろうか。

だけど私が陽ちゃんにお弁当を作つてくることをやめようと思わないのは、陽ちゃんがそれを口に運ぶほんの瞬間の顔がほころぶあの表情を、また見たいと思つてしまうからなのかもしれない。

次第に目の前に学校が見えてくる。そこを私たちは、同じ教室を目指して歩いていく。陽ちゃんとはこの三年間、ずっと変わらず同じクラスだった。クラス替えてまた陽ちゃんと一緒のクラスになれたときは、すごく嬉しかったのを覚えている。

だけど陽ちゃんは、どうやらそれをそれとしてしか捉えていないようだった。そんな姿を見つと、私の喜びが空回りしてしまつていくようで悲しくなる。クラス替えだけじゃない。私が陽ちゃんと一緒に歩いているこの瞬間でさえも、陽ちゃんにとっては単なる事実でしかないのかと思うと、ちよつとだけ寂しかった。

教室へと続く廊下にもまた、例の欠片は漂っていた。しかし、それはある意味で私にとって初めて見る光景だった。

校内で七色の欠片を見かけることは今まで滅多になかったからだ。それまでこの欠片を私は何らかの気象現象なのだろうと決め付けていたのだけれど、締め切られた廊下を浮遊するそれを見る限り、どうやらそうでもないらしかった。

閉塞的な空間の中で、多様に光る欠片が漂うこの光景は、私に微かな息苦しさを感じさせた。まるで実像と虚像の境界線が不鮮明になるような、そんな息苦しさだ。ただ、そのことを陽ちゃんに話すと、「ああ、そうだな」と、妙に気のない返事が返ってきただけだった。

教室に到着すると、私たちの方に近づいてくる人影があった。

「今日もふたりでご登校？ いやあ、お熱いねえ」

からかうような笑みを浮かべているその男の子は、クラスメイトの大飼くんだった。

声をかけられた私たちは、口を揃えてこう答える。

「私たちは別に……」

「そうだと、こいつが勝手に起こしに来るからだ」

陽ちゃんの否定は、私のそれよりも、ちよつとだけ強いものだったのだけれど。

「そうなの？ じゃあさ」

それを聞いた大飼くんは、優しい微笑みを浮かべる。

「俺も夏実ちゃんに頼んだら、起こしに来てくれる？」

私は肯定するでも否定するでもなく、曖昧な笑いで濁した。

悪い人ではないとは思っただけで、私は大飼くんこういう仕草が少し苦手だった。

「ねえ、ダメ？」

そう言って大飼くんは私の手のひらを握り込んだ。握られた手から伝わってくる温かさは、少しだけ乾いている。だってそれはきつと、私に向けるべきものではないはずだから。

私は視線をわずかに横にずらして、陽ちゃんに助けを求める。

「ただ陽ちゃんは、つまらないものでも見ているかのように大きな欠伸をしていた。」

陽ちゃんは頼りになりそうもない。私は仕方なく、その口を開いた。

「ええと、あの——」

「——いてっ」

そのとき、大飼くんが突然頭をさすり始めた。見ると足もとに、小さな消しゴムが転がっている。大飼くんは背後に向かって吠えた。

「なにすんだよ！」

その先にいたのは、大仰に腕を組んで立っているひとりの女の子だった。

「しつこ過ぎんよ、あんたは」

「関係ねーだろ、お前には」

瞳に怒気を宿したその子は、歯切れの悪い毒を吐く犬飼くんに対し毅然とした態度で迫っていく。

「関係あるに決まってるじゃない。なっちゃんが困ってる」

本当は困ってるというのは、ちよつとだけ違った。ただ、申し訳ないだけなのだ。空中に舞う七色の欠片の隙間から時おり覗かせる、彼女の苦しそうなその表情を知ってしまったから。

「そのどこが関係あるっての？」

「だって私たち、友達だもん。ね、なっちゃん」

「ただそんなことは、目の前のこの子——楓ちゃんには言えなかった。」

「——ほらお前らー、席に着けー」

幸か不幸か、先生が教室に入ってくる。扉の前で話していた私たちは、それに押し込まれるように自分たちの席へと散らばった。席に向かいながら、私は少しホツとしてしまう。それはきっと、

楓ちゃんが微かに見せる辛そうな顔を見たくなかったからだろう。ただのお節介になりにかねないのかもしれないけど、私はこの状況を、どうにか出来ないものかと考えてしまうのだった。

席に着いた私は教室内の様子に、少し違和感を覚える。

席に着いている生徒が少な過ぎた。別に先生の声を無視して立っている生徒がいるわけではない。そうではなく、今この教室にいる生徒の絶対数が少ないのだ。教室の半数近くが空席になっている。それはまるで、季節外れのインフルエンザでも通り過ぎた後かのような静けさだった。

けれども教壇に立つ先生はそのことに触れようとはしなかった。欠席を咎めるわけでもなく、流行の病気を警告するわけでもない。ただ淡々と、一日の連絡事項を述べていくだけだ。

七色の欠片が、陽炎のように教室を舞っていた。それはどこか、それらが欠席者たちの埋め合わせをしているように見えた。

私は隣の席で机に突っ伏していた陽ちゃんの脇腹を小突いた。

「……なんだよ」

陽ちゃんは顔を上げると、迷惑そうな顔で私の顔を覗む。

「ねえ、今日休んでる人多くない？」

私はたった今感じていたその疑問を、陽ちゃんに投げかけた。

意味なんて何もないのかもしれないけど、それでも誰かの同意を得たかったからだ。

けれど陽ちゃんは、露骨に顔をしかめた。私の言っている意味が分からないとでもいう顔だった。

「気のせいじゃねえか？」

私の問いを一蹴して、再び眠る体勢になろうとする。でも、その直前で陽ちゃんの動きは止まった。

「そーいやさ」

私のほうを向いて、呟く。

「なんでお前、謙吾に誘いすぐに断らなかったの」

「なんでって……」

さつきとおんなじ、つまらなそうな顔で私の目を見ていた。私にはなんとなく、そこから目を逸らしてしまう。

「すぐに断るのは悪いかなーって」

「あそ」

それだけを言うと、再び頭を机に伏せてしまった。私はなんだか釈然としない気分だったけれど、それ以上追及したところで機嫌をもっと損ねてしまうだけだろう。授業が始めるまでは、陽ちゃんをそのまま寝かせておくことにしたのだった。

それからというものの、私には一日じゅうぼんやりとした違和感がつきまとっていた。何かがおかしいはずなのに、誰もそれをおかしいと思っていない、孤独に包まれたような感覚。

それは授業がすべて終わり、これから帰途に就こうという今もずっと変わらなかった。

校門の前に立っていると、ふと欠片が目の前を漂っているのが目に映った。私はそれを、両手のひらでそっとすくい取る。手のひらで踊るその欠片は、夕方の陽の光を浴びて、淡く琥珀色に輝いていた。

そういえばこの欠片が見えるようになったのは、いつからだっただろう？

私は欠片の先に見える景色に、見知った顔が歩いているのを見つけた。相手のほうも気付いたようで、こちらに近づいてくる。

「よう、天川ちゃん。今から帰り？」

そこにいたのは犬飼くんだった。私は彼からの問いに、こくと頷いてみせる。犬飼くんの背中に、女の子がついてきているのが見えた。この前まで連れていた子とは、違う女の子だった。

「あれ、陽介は？」

「今日は陽ちゃん掃除当番だから」

「ああ、だからここで待ってるわけね」

犬飼くんは、合点のいった顔をする。

「犬飼くんは？」

「俺は今からお茶しに行こうと思って。一緒にどう？」

後ろの女の子が犬飼くんの袖を引っ張っていた。

「冗談だって。じゃあ、俺たちはそろそろ行くよ。あ、それと天川ちゃん」

犬飼くんは私の耳元まで近づいてから、囁いた。

「楓にはこのこと、内緒で頼むわ」

この人は分かっている。私には、楓ちゃんにそんなことを言えないっていうことを。でも、それならどうして夕陽に沈む彼の顔は、そんなにも悲しそうな眼をしているのだろう。

私は犬飼くんを見知らぬ女子生徒が夕焼けの霧の中に消えていくのを、ただ黙って見つめていた。

「どうしたの、なっちゃん」

そんなとき、背後から誰かが私に声をかけてきた。

振り向く私は、その声で、見ずともそれが誰か分かった。

「楓ちゃん……」

私は楓ちゃんを前に、どんな顔をしたら良いのか分からなかつ

た。どんな声をかければ良いのか分からなかつた。だって楓ちゃんの本当の気持ちを知っていて、あんな場面に遭遇してしまったのだから。

私の一瞬の迷いが、その場に刹那の沈黙を生む。

「お願いだから、なにも言わないで」

消え入るような声で、楓ちゃんはそう言った。

その言葉を聞いて、私は分かった。楓ちゃんも先ほどまでの光景を、その目で見ていたのだということに。

「それじゃ私、もう帰るわ。またね、なっちゃん」

私はさよならの一つも言えずに、その背中を見送る。そのあいだ、少しずつ小さくなっていく背中が微かに震えていることに、私は、ずっと気付かないふりをしていた。

ふと、頭の上に重さを感じる。

「待ったか？」

見上げると、陽ちゃんが私の頭の上に手をのせていた。

私は涙声になりそうなのを必死に抑えながら、言葉を紡いだ。

「陽ちゃん、来てくれたの？」

「なに言ってるんだ？ 最初から一緒に帰る約束してただろ？」

「そうだけど……」

「ただどうしてだろう。陽ちゃんがここに来てくれないような気がしていたのは。もう二度と陽ちゃんとは会えないような、そんな気がしていたのは。」

「なに泣きそうな顔してんだ」

「泣いてないもん」

「そか」

陽ちゃんはそれ以上問い詰めようとはしなかった。ただ、私にはそれが心地良かった。それは普段ぶつきらぼうな陽ちゃんの、不器用な気遣いが感じ取れたからなのかもしれない。

「じゃ、帰るか」

そして私たちは、七色に煌めく道をふたりで歩いていった。

次の日は、朝から何かがおかしかった。

普段通りの時間に陽ちゃんと共に教室へ着いた私は、その光景に妙な違和感を覚えた。

ホームルームが始まるまでそんなに時間があるわけでもないのに、教室には人が殆どいなかった。いや、正確にはクラスメイトが二人だけ、そこに存在していた。

楓ちゃんと犬飼くんだ。

二人はまるでいつもと変わらない様子で、口喧嘩をしていた。ただ他に誰もいない教室の中で練り広げられるそれは、いつもと違って寂しく虚空へと響いている。そして殆ど質量を持たない、浮遊する七色の欠片だけが、私たちを包み込んでいた。

「なにポーっとしてんだ、夏実？ 入ろうぜ」

「う、うん」

陽ちゃんに促され、私は教室の中に踏み入れる。

「あ、おはようなつちゃんと朝比奈くん」

「……おはよう」

「ねえ聞いてよ、なつちゃん。謙吾が——」

私を認めた楓ちゃんが、いかにも不満そうな口ぶりで話し出す。

「どうして？ どうして何も不思議に思わないの？ クラスのみんながどこにもいないのに。この不自然なくらいに閑散とした教室に、どうして誰も疑問に思わないの？」

私は我慢できなくなつて、クラスメイトの所在を聞き出そうとした。

「あの、クラスのみんなは？」

「ただ楓ちゃんは、困ったような顔でこう言った。」

「みんなって、誰のこと？」

「……え？」

私には楓ちゃんが言ったことが、私には理解できなかった。楓ちゃんは私のことをからかっているのだろうか。私はクラスメイトの一人の名前を口にしようとする。

「あ……」

しかしそれを言おうとして気付く。私は消えたクラスメイトの名前を、誰一人として覚えていないということ。

喉から絞り出そうとした声は、そのまま音にならずに消えてしまふ。

必死に自分の頭の中を探っていく。だけど名前はおろか、その顔さえも、一向に思い出すことができない。私は頭が真っ白になって、それ以上何も言えなくなってしまふ。

「お前、なんか変だぞ？ どうしたんだ？」

隣にいた陽ちゃんは、私の顔を覗き込んでいた。

「だ、大丈夫」

私は何とか一言だけ声を発する。

「そうか？ 席に座って少し休んどけ」

けど陽ちゃんは私の強がりを受けけてはいないようだった。

陽ちゃんに促され、私は自分の席に座る。

私はまだ、この状況を整理することができずにいた。まさか存在そのものが、消滅してしまったとでもいうのだろうか。いやそれとも、クラスメイトそのものが、初めから存在していなかった？ 一瞬そんな考えが頭をよぎるも、私はそれをすぐさま否定した。もう考えるのはよそう。今は教室にいないだけで、きっとみんなどこかにいるはずなのだから。

「席に着けー」

そんな時、先生がドアを開け教室へと入ってきた。その声を聴いた時、私は少し安堵する。それはつまり、ここにいた三のほかにもまだ誰か人がいたということだったからだ。

だけどその先生の姿を見た瞬間、私は思わずその目を疑わずにはいられなかった。

教壇に立った先生は、まるで影を纏ったように霞んでいた。次第にその輪郭はぼやけてきて、その姿を捉えきれなくなる。

もうそれを、人であると判断することさえ困難になっていた。

私は声を出せなくなっていた。先生にまつわる記憶が、溶け出すように消えていくのが、今この時はつきりと感じられていた。

このクラスで過ごしていた日々が、ゆっくりと鮮明さを失っていく。この一年間が、ゆっくりと色を失っていく。

もうついに、先生のかたちさえ思い出すことができなくなっていた。

私は思わず立ち上がって手を伸ばす。当然ながら教壇までその手が届くことはない。だいたい黙って見ていたら、もう二度と手の届くことのないところに行ってしまう気がして怖かった。私は必死に、その原形をとどめていない何かを掴もうとする。

けれどそれは霧のように薄くなっていき、そして——消えた。

もうそこには何も残っていなかった。その姿も、影も。そこに何かがあったという名残さえ。

何かの消滅した教壇の周りには、七色の欠片が、ただ渦を巻くように漂っていた。

「っ！」

私はついに我慢できなくなつて、教室から飛び出す。

「夏実っ！」

陽ちゃんの声が聞こえたけれど、私は足を止めなかった。今この足を止めたら、陽ちゃんまでが消えてしまいそうな気がしたから。

そのまま陽ちゃんの声が聞こえなくなるまで、私は走り続けた。

無我夢中で走り続けた私は、中庭に出たあたりでやっと我に返った。走っていた間には感じなかった疲れが、立ち止まった瞬間どつとやってくる。私は息も絶え絶えに膝に手を突く。額から流れ落ちる汗の粒が、地面に小さな染みを作っていた。

先ほどから鼓動が治まらない。この鳴りやまない心臓の音は、休むことなく走り続けたせいなのか、それとも別の理由のものなのか、私には分からなかった。

少し先にベンチを見つけ、やっとのことで腰かける。自分の体重を預けていると、少しだけ心が落ち着いてくる。だけど、胸の鼓動だけは、依然として消えることはない。

どうして先生はいきなり消えてしまったのだろう。いやその前に、クラスのみん々が教室にいなかったのは、もうすでに消えてしまっていたからなのではないだろうか？

その問いかけはぐるぐると回って、頭の中からずっと消えなかった。

「お、いたいた」

ふと、不意に声が出た。

「いったいどうしたんだよ、天川ちゃん」

そこにいたのは犬飼くんだった。

「二人とも探してるぞ。特に陽介なんてすつげえ慌ててき、超傑作だったよ」

謙吾くんが面白そうに語る。だけど私はそれに、うまく答えることができない。

「……どうしたの、そんな思いつめた顔してき」

そんな私を心配したのか、犬飼くんは私に対してそう、優しくな口調で言った。

「なんか悩みがあんなら、聞くけど？」

けど本当のことをいっても、たぶん信じてくれないだろう。私はちょっとだけ悩んだ末、犬飼くんにこう切り出した。

「もしも……誰かが目の前で消えてしまったら、どうする？」

犬飼くんはそんな質問が来るとは思っていなかったようで、少し面を食らっていた。だけどすぐに私の問いに答えてくれる。

「そうだな、嫌な奴だったら、清々するかも」

「大切な人だったら？」

すると犬飼くんは少し考えてから、こう答える。

「やつぱりよかったって、思うかもしれない」

それは予想外の答えだった。

「だって大切な人といるときって、辛いだろう？」

犬飼くんは曖昧に笑っていた。

「犬飼くんの大切な人って誰かいいる？」

私は犬飼くんに対するその人が誰なのか知りたかった。だけど本当は、もう予想がついている。

「楓かな」

犬飼くんは私の予想通りの人物を答えた。

「犬飼くんは、楓ちゃんのことどう思ってるの？」

「楓のこと？」

「うん」

「好きだよ」

彼はあまりにもあっさりとして、そう言った。

「じゃあどうして」

どうして楓ちゃんに答えてあげないの？ そう言おうとして、けれど直前で犬飼くんに制された。

「俺は嫌なんだ」

謙吾くんは乾いた笑みを漏らしていた。

「嫌なんだ。勝手な話かもしれないけどさ、俺みたいな人間が楓を穢してしまうのが」

とそこまで言って、犬飼くんは口をつぐんだ。

「ちよっと話が逸れたな」

そう言って話を最初に戻す。

「答えになるか分かんねえけど、たとえ誰かが消えちまっても、自分がそいつのことを強く思っていればいいんじゃないか？」

「それってどういうこと？」

「そうすれば、少なくとも自分の心の中からは消えてなくならないだろ」

犬飼くんの言葉は少しだけの射ないものだったけど、それでも私はなんとなくそれに救われた気がした。まだこの状況をどうしたらいいのか分からないけど、それは一つの道しるべになるように、そう思えた。

「ありがとう、犬飼くん」

私はそれに対してお礼を言おうとした。

だけど、そこにはもう誰もいなかった。何もない空間を私は、誰かを探すようにずっと眺めていた。ここには誰がいたのだったろう。私は、その人に何を言おうとしていたのだろう。私の言葉はその人に、ちゃんと届いたのだろうか。

その人の影はもうない。

代わりに七色の欠片が空高くへ飛んでいった。

また独りになってしまった私は、誰もいなくなった廊下を歩いていた。歩を進めるたびに、七色の欠片がふわりと弾む。それはまるで私がこうして一歩ずつ踏み出していくたびに、記憶があられ出しているようだった。

歩いていると、反対方向から楓ちゃんが歩いて来るのが見えた。

「おーい、なっちゃん」

私はなぜか、今は楓ちゃんと会いたくなかった気がした。だけど私そんな気持ちとは裏腹に、楓ちゃんは私のほうに近づいてくる。

「もー探したよ、なっちゃん。急にいなくなるから、朝比奈くんと二人でずっと探してたんだよ？」

「えっと、ごめん」

「早く戻ろう？」

楓ちゃんは自分の来た道に戻ろうとする。教室に向かう楓ちゃんの背中を見ながら、私はふと、思ってしまう。もしかしたら楓ちゃんも消えてしまうのではないだろうか。

そう考えると、私の足はもうそれ以上一歩も進まなくなっている。

た。

「……なっちゃん？」

楓ちゃんは私がついてこないのに気付いて、立ち止まる。

「楓ちゃんがいなくなっっちゃうの、やだよ……」

私の口からはいつの間にか、弱音が漏れていた。

「楓ちゃんと離れ離れになるのやだよ……」

「そんなわけないじゃん」

楓ちゃんはきつぱりとそう、言い切った。

「確かに今年の春にここを卒業したら、きつとみんなバラバラの道に進むかもしれない」

楓ちゃんはまっすぐに私の目を見ていた。それはすごく真剣なまなざしで、私はいつの間にかその瞳に引き寄せられる。

「けど、たとえ卒業したって、ずっと離れ離れになるわけじゃないじゃない」

その瞳は、純真で、純粹で。

「ずっと会えなくなるわけじゃないじゃない」

私は忘れていた。楓ちゃんのそんなまっすぐなところが好きだったのだということ。

「だけど忘れちゃうかもしれないよ？」

「大丈夫だよ、忘れるわけない」

楓ちゃんはその力強い言葉は、私に言葉以上の何かを感じさせていた。

私は、信じてもいいのだろうか。

「卒業してからもさ、たまに四人で集まって、一緒に遊んだりしようよ」

楓ちゃんは私に向かって手を伸ばす。

「だって私たちはずっと友達なんだから」

「うん——」

私はそのまっすぐに伸ばされた手を触れようとした。だけど私の手のひらは何も触れられずに空を切る。

その子はもう、そこにはいなかった。

私は必死にそこにあつたはずの何かを探した。それがどんな形で、どんな色をしていたのかも分からないまま。

私にとってそれは、どんな存在だったのだろう。忘れてしまうくらいいつぼけなものだったのだろうか。今となってはそれすら

も、もう思い出すことはできない。けど少なくともそれは私にとつて、とても大切なものであつたはずであつたように、そう思

えた。

七色の欠片の渦が、つむじ風のように回っていた。

きつとみんな、消えちやうんだ。

あと私が覚えているのは陽ちゃんだけだった。ほかの人たちはもう、その輪郭さえ思い出すことができない。

誰もいなくなったら、私はいったいどうしたらいいのだろう。

誰が私を、私であると知ってくれているのだろう。

「夏実っ！」

私の名前を叫ぶ声が聞こえる。それは私が聞き馴染んでいる陽ちゃんの声そのものだった。

私は陽ちゃんに向かって、呟く。

「みんな消えちやったんだ」

「みんな？」

陽ちゃんは最初、分からないというような顔をした。だけど私の心をくみ取ったのか、それは次第に真剣な面持ちになる。

「大丈夫だ、俺は消えない」

けれど私は、それを信じられなかった。みんな消えてしまったのに、陽ちゃんだけが消えないなんて、そんなはずない。いくら否定したくても、その事実は私に重くのしかかる。

「無理だよ……。みんないなくなつて欲しいわけなんてないのに、いなくなつちやったんだよ？ それなのに、陽ちゃんだけいなくならないなんて」

私は陽ちゃんが消える瞬間を見たくなかった。

「これ以上陽ちゃんと一緒にいても辛いだけだよ」

だからせめて、忘れてしまうその時だけは、忘れてしまうことを知らないでいたかった。

「だから私に、優しい言葉かけないでよ」

それなのに。

それなのにどうして陽ちゃんは、私をこんなふうに抱きしめるのだろう？

「ばか、俺はお前のことが大切なんだよ」

どうしていつも私のそばにいてくれるの？

「記憶なんて関係ない。今まで俺はずっと夏実のそばにいたんだ。だから夏実がもし俺のことを忘れたとしても、俺は絶対にお前を離さない」

離さない」

陽ちゃんはいつもそうだった。私が悲しいときにいつも慰めてくれた。私が辛いときに一緒にいてくれた。

「俺はずっとそばにいるから」

「うん」

だんだん意識が薄れてきて、目の前にいる人の記憶が曖昧になつていく。

「ただ私はそのひとの腕の温もりをずっと感じていた。」

「ねえ、まだそこにいる……?」

「ああ」

それが消えてなくなってしまうその時まで、ずっと感じていた。

◇

失くしてからその大切さに気付くなんてよく言ったものだと思うが、まさか俺がこの言葉について考えさせられる日が来るとは思ってもみなかった。

確かマリー何かの言葉で、パンがなければケーキを食べればいいみたいなのがあったろ? だけど意図的にケーキを選び続けていた俺にはもうパンなんて選択肢はなくて。購買のパンなんてもはや雑巾みたいなものだ。腹が減ってからって雑巾をしゃぶろ

うなんて気は起きやしない。そういうことだ。

つまり何が言いたいのかというと。

「夏実……早く帰ってこい……」

掠れた声を絞り出した俺は、そのまま頭を机に擦りつけた。腹の底からは低い音が鳴り続けている。

夏実が事故に巻き込まれて入院してから、今日で三日になる。

その日俺は掃除当番だったため、一緒に帰ろうとする夏実を無理に家に帰した。そして一人で帰る道の途中で、夏実が交通事故に巻き込まれ病院に運び込まれたことを知った。

最初それを知った時は、どうしてあの時無理に家に帰してしまったのかと、後悔で埋め尽くされそうになった。あの時夏実の言うとおりに校門の前にも待たせておけば、もっと違う結果になっていたかもしれないのに、と。

しかしこうして命に別条はないと知った今は、ただただ夏実の退院が待ち遠しかった。

「天川ちゃんがいらないからって、ずいぶんなご様子じゃないか」

頭上から声が聞こえた。

「うるせえよ」

俺は首だけを回して、そこにいる男——謙吾を見上げた。謙吾

はこれ見よがしに雑巾、もとい購買の惣菜パンを頬張っていた。
「うーむ、この添加物満載のチープな味わいがクセになるんだよな」

「なんだよ、当てつけか？」

「まあ、日ごろの恨み的な？　いつも愛妻弁当見せつけられてたからさ」

「ぬかせ」

俺は謙吾の言葉を一蹴した。謙吾は大げさに肩をすくめてみせる。毎度こいつは何のつもりなんだ。そこまで俺と夏実をくつつきたいのだろうか。

「とここでさ、今日の放課後はどうする？」

「どうするって？」

「楓は天川ちゃんのお見舞いに行くらしいけど」

なるほど、穂村か。穂村は俺の見る限り夏実と一番仲がいいみたいだから、きつと心配なんだろう。

「で、それにお前も付き合うのか」

俺がそう尋ねると、謙吾は少し渋い顔をした。

「もちろん、見舞いにはそのうち行くさ。けどな、あえてあいつと一緒に行く必要はねーと思うんだ」

つまり謙吾は穂村と肩を並べて見舞いに行くのが嫌らしい。そもそもなんで穂村もそこまで謙吾に構うのか、俺にはいまいち理解できなかつたが。

しかし見舞いね。昨日顔を見せに行つたばかりだが、もしかしたら夏実も暇してるかもしれない。俺も今のところ予定はないし、気が向いたら行つてみるか。

そう思いながら、俺は再び机に突っ伏し、休み時間が終わるのを待った。頭の中で、放課後のことをずつと考えながら。

放課後、謙吾と共に校門を出た俺は、謙吾に話しかけた。

「俺、夏実のところに行こうと思うけど、お前はどうする？」

すると謙吾は親指で自分の背後を指さした。

「俺はあれだ」

謙吾の指した方を見ると、おとなしそうな女子生徒が一人で歩いているところだった。

「お前もよくやるよな」

俺は呆れて溜息しか出なかつた。

「じゃ、行つてくる」

そういつて謙吾はその生徒のほうに向かっていった。なんとなく俺はその場で様子を眺める。

謙吾は生徒に接触したかと思うと、そこで何か話し始める。かと思えば、一緒に歩き出した。相変わらず大したもんだ。いったいどんな会話を交わしているのか、一度くらい聞いてみたいくらいだ。まあ試す気はさらさらないが。

謙吾の口元が、俺にしか見えない角度で微かに動く。それは俺には、イタダキマスと言っているように見えた。

「くそ、調子に乗りやがって」

なんだか負け惜しみかのように聞こえた気がするが、たぶん気のせいだろう。

俺はこの微妙な敗北感を道に転がっている石ころにぶつけた。

宙を舞った石ころは、放物線を描いて彼方に消えた。

「あれ、朝比奈くんじゃん」

ストレスを発散して気持ちよく目的地に向かおうとしたところ

で、俺は誰かに声をかけられ、振り向いた。

「おう、穂村」

「どうしたの？ こんなところで」

「今から見舞いに行こうと思っただけ。穂村もそうだろう？」

「そうなんだけど……」

穂村はしきりに辺りを見回していた。

「謙吾か」

「一緒に行くつもりだったんだけど、朝比奈くんどこか知らない？」

これは本当のことを言うべきなんだろうか。歩いて行った方向からすると恐らく、あの喫茶店なんだろうが……。

「たぶん喫茶店にいるぞ」

思い出したらムカついたので、本当のことを言った。

「あの野郎、今日という今日は目にも見せてやるんだから！」

合掌。

「教えてくれてありがとう。それじゃ」

「穂村」

俺は踵を返そうとする穂村を呼び止めた。

「ひとの趣味とやかく言うつもりはねーけどさ、あの男はやめた方がいいと思うぞ」

「はあ？ そんなんじゃないから。なっちゃんのお見舞いに連れていくだけだし」

「そんなもん一人で行けばいいじゃねーか」

「ほっといたら絶対行かないじゃん、あいつ」

「ふーん」

そういうもんかね。まあ、いいけどさ。

「じゃ、俺も先に夏実のとこ行ってっから」

「うん、またね」

俺は苦労人の背中を見送ってから、病院へと向かった。

病室に着くと、夏実は起きあがりベッドに腰をかけていた。部屋の隅には昨日まではなかった花瓶やらが置かれている。おそらくこの前に誰かが来ていたのだろう。

夏実の顔は、どこか思いつめたかのような暗い影を落としていた。呆けたように焦点を失った瞳は、まるで何かの夢を見ているようだった。

「夏実」

「あ、陽ちゃん」

俺を見た夏実の表情が、ぱつと華やぐ。

「誰か来てたのか？」

「うん、たぶんクラスの子」

たぶん？

その言葉にわずかな違和感を感じずにはいらなかったが、夏実の表情に再び翳りが訪れるのを見たため、俺はそれについて問い詰めようとはしなかった。

「陽ちゃん、お昼ちゃんと食べてる？」

一瞬空気が澱んだのを察したのだろう。夏実が唐突に話を切り替えた。

「おうよ、毎日好きなもんが食べられてラッキーなくらいだぜ」

「そっか」

夏実の表情がちよつと沈んだように見えた。俺はそれを見て少しだけ取り繕う。

「まあでも、夏実が作った弁当もちよつとは食べたいかもな」

「え？」

「ずっと食べ続けたせいで舌が慣れちまったんだよ。だから、さつさと退院しまえ」

「うん、分かった」

夏実に笑顔が咲く。それを見て俺は少し安心する。あんな暗い顔をした夏実なんて、俺の知ってる夏実じゃなかったから。俺が来てなかったら、もしかしたらこいつはずっとこんな辛気臭い顔をしていたのかもしれない。だから俺は今日も見舞いに行つてよかったと、なんとなくそう思った。

次の日の教室で、夏実に関する妙な噂が流れていた。

きのう見舞いに行ったクラスメイトの何人かを、夏実が邪険に

扱ったというのだ。

俺にはそれが俄かには信じられなかった。夏実がそんなことする奴じゃないことくらい、俺が一番分かっていたから。

その日の放課後、俺は再び夏実の病室に訪れていた。今度は謙吾と穂村の二人と共に。謙吾は最初は渋っていたが、三人で行くということに一応の妥協を見出したようだった。

夏実には、どこにもおかしなところはなかった。しいて言えばまた少し表情が暗いというくらいだが、病院での生活が続けばそれだけ気苦労も絶えないことだろうから、仕方のないことだと思っただけだ。

それから俺たちは三人で、しばしば見舞いに行くようになった。

しかし異変が起こったのは、それから数日後のことだった。

見舞いに来た謙吾を見て、

「あの、誰ですか？」

そう言ったのは。

「は？ 夏実、なに言ってるんだ？」

俺は最初、夏実が冗談を言っているのかと思った。それにしてもタチの悪い冗談だ。まさか夏実がこんな冗談を言うなんて。

だが夏実は、俺を不安そうに見つめながらこう言った。

「ねえ陽ちゃん、この人……誰？」

その時俺は、悟ったのだった。

夏実が、記憶を失くし始めているのだということに。

例の一件以来、夏実の見舞いに行くのは俺と穂村の二人だけになっていった。夏実の平静を保つため、謙吾には見舞いを控えてもらっていた。

それ以来、夏実の姿は目に見えてやつれていった。おそらく自分でも気づき始めているのだろう。自分が徐々に記憶を失っているのだということに。

原因は医者にさえも分からないしかった。だが、おそらく夏実が遭遇した交通事故の影響なのは確かだろう。それ以外には考えられなかった。

俺は毎日のように夏実のところに通っていた。だが一向に改善の兆しが見えることはなかった。それどころか、何かに怯えるような様子を見せることさえあった。

俺は情けなかった。自分は何もできないというが。夏実がすぐそばで苦しんでいるのに、ただ見ていることだけしかできないのだということが。

そんな時、さらに最悪の事態が起きた。

俺が夏実の病院に向かうと、その病院の入り口に、そこにぼつんと独り、穂村が立っていた。

穂村はいつもと雰囲気が違うような気がしたが、その違和感は些細なものに見えたので、俺は気にせず声をかけた。

「おう、穂村も今から見舞いか——」

その時だった。俺の身体が、上のほうへ引つ張られた。だが、その力はあまりにも弱弱しく、身体は殆ど持ち上がらない。

見ると穂村が、俺の制服の襟をいきなり掴んでいた。

「なんで私じゃなくて朝比奈なのっ！」

穂村の頬には、一筋の涙が伝っていた。それを見て俺は気付く。

とうとう夏実は、穂村のことも忘れてしまったのだということ。

俺は抵抗することもなく、ただなされるがままにしていた。

穂村は突然俺を離すと、苦渋に顔をにじませながら病院から去っていった。穂村がいなくなった後も、俺はただ立ち尽くすしかなかった。

しばらくそうしていると、謙吾がどこからか現れた。謙吾は俺を見つけると、こちらへと歩み始める。それを俺は、ただ黙って見ていた。

「楓が泣いてたんだ」

謙吾は俺の前で立ち止まると、淡々とした口調でそう言った。

「天川ちゃんが自分のことも忘れちゃったんだって言って、泣いてたんだ」

しかしその声にはわずかに憤りが含まれていることを、俺は感じ取った。

「それなのに、なんでお前は、そんな平気な顔してここにいるんだよ」

平気なわけねえだろ。

心ではそう思うもうものの言葉は出てこない。

「なんとか言えよっ！」

俺の胸ぐらを掴んでくる。謙吾の拳がめり込んで、胸が痛む。

どうしてこうなっちゃまったんだ。俺は卒業するまでの残りの数か月間を、夏実たちと笑いながら過ごしていただけなのに。

こんな終わり方なんて、そんなの違えだろ。

「俺はもう楓のあんな顔見たくねえんだよ……」

穂村にとつて、夏実は一番の友達だったはずだ。穂村の悲しみはきつと計り知れない。だけど穂村はもう忘れられてしまったんだ。穂村にはもうどうすることもできない。

謙吾はもう一度俺の胸ぐらを握りしめた。

「俺たちを救えるのはもう、お前しかないだろ」

「……なにが言いたい」

「もう天川ちゃんのそばにいられるのはお前だけだろうがっ！」

俺はその言葉で我に返った。

そうだ、夏実はまだ恐怖に怯えてるんだ。独りぼっちになつてしまいかもしれない恐怖に。それなのに俺は、どうして夏実のそばにいてやらないんだ。

俺は謙吾の手を振り払って、夏実の病室へと向かった。

「夏実っ！」

病室に入った俺がすぐさまそう叫ぶと、夏実は俺に向かってこ
う呟いた。

「ねえ陽ちゃん、今日ね、ここに知らないおじさんとおばさんが
いたんだ。それでね、自分たちのこと、私のお父さんとお母さん
だつて言うんだよ。可笑しいよね」

その目は真っ赤に腫れていて、見ているのがつらかった。

「みんな消えちゃったんだ」

「みんな？」

俺は最初、夏実が何を言ってるのか分からなかった。だがやが
てそれが、記憶がなくなっているということなのだということを
理解する。

「大丈夫だ、俺は消えない」

俺はそう夏実に語りかけた。何の根拠もなかったが、それでも
俺だけは夏実の記憶から消えないという自信があった。いや、も
しかしたらそれはただ消えたくないというだけの願望なのかもし
れない。しかし、それでも夏実の中から消えないはずだと、自分
にもそう言い聞かせる。

しかし夏実の表情は、いつそう悲壮に歪んだ。

「無理だよ……。みんないなくなつて欲しいわけなんてないのに、
いなくなつちやつたんだよ？ それなのに、陽ちゃんだけいなく
ならないなんて」

俺はどうして夏実がこんなに悲しんでいるのに何もしてやるこ
とができないのだろう。どうしてこんなに無力なのだろう。

そう考えたとき、俺の腕は、無意識のうちに夏実を抱きしめて
いた。

「ばか、俺はお前のことが大切なんだよ」

夏実の柔らかい肌は冷たく震えていた。俺は震えが治まるまで、

優しくその背中を抱いていた。

「記憶なんて関係ない。今まで俺はずっと夏実のそばにいたんだ。だから夏実がもし俺のことを忘れたとしても、俺は絶対にお前を離さない」

そうだ。例えばどんなことがあったとしても、俺が夏実のことを思ってやればいいだけなんだ。そうすれば俺と夏実の思い出は、絶対に消えてなくなることはないはずなんだ。

どんなに横暴な理論だっていい。どんなに根拠のない自信だっていい。俺と夏実にとってのそれが、ただ真実であればそれでいいんだ。

「俺はずっとそばにいるから」

「うん」

もうたとえどんなことが起きたって、俺は夏実を離さない。

「ねえ、まだそこにいる……？」

「ああ」

俺は夏実が眠りに落ちるまで、彼女をずっと抱きしめていた。



私の目の前に、見知らぬ人が立っていた。

けどその人は、私が知らないはずの人なのに、どこか懐かしくて。

「あなたは、誰？」

問いかけた私に、その人はこう答えるのだ。

「お前を——迎えに来た」

これは夏の終わりにとり残されてしまった私の、はじまりの物語——。

うととき under ander Dämmer

星井 靄

あの、今から、それじゃあ、話を始めたいと思います。が、その前にちょっとだけ、脇道へ逸れてみようかと、視線が痛いですが、けれども、はい、脇道っていうのは歩いて行けば大抵メインストリートに通じてるわけで、だから、脇道って言うんですね、ってそりやそうかって、失礼、それで、その側道と言ひ換えたらいいのか、まあ、脇道でも側道でも小路、パサージュと言ったら格好つけすぎかもしれないのですけれども、その、支線、曲角を、こう、曲がった先にある道っていうのはですね、目抜き通りから基本的に伸びているわけで、ってこれはたったいま言いました。その道へと至る道、様様に交差しているわけで、それぞれがまた通りを形成しているんですね。その、何でしたっけ、あの、テキストト、じゃないな、教科書みたいなやつですね、テキストじゃ、なんでしょうか、先生に訊いたら早いですね。そうですね、テキスト、スト、って言うんですか、これ、あの、黒板借りますね。いや、返せないですけど、あれ、この方がテーマとして相応しいですか。いや、でも、ちゃんと考えてきますからね、ぼく。だから、ち

やんとやりましよ、黒板には頭を殴られてますしおあいこです。と言うわけで、この、テキスト、こつちからもこつちからも、こつちやうって線が伸びてきてですね、はい、ここで交差、してますでしょ。このクロスしてるやつ、交差点、座標、まあなんでもいいのかもしれないが、いや、よくありませんけれども、それで、あのう、誰でしたっけ、これ言い出したのは、問題になるような形で、相撲取りみたいな名前の人、ああ、そうそう、バルトでしたっけね、はいはい、バルトバルト、大関大関、えっ、ああ、そうかそうか、引退したんですか。そうですね。その、まあ関取は関係ないですね。あつ、いま関係って言葉、出ましたけど、あ、カールおじさんでもないですよ、ええ。で、なんだったかな、テキストのパワーアップしたようなやつ、ニャンテキストじゃないし、ワンテキストでもないですね。モウテキストだったかな。いやいや、ポンだったかしらん。あ、狐だった。コンテキストですね。これ、訳すとしたらなんでしょうね、普通は訳さないですけど。お洒落ですもんね、横文字って。そんなことより、そう、ウイリアム・ジェイムズっていう、この人、プラグマティズムの代表格ですけど、なんとびっくり、弟はかのヘンリー・ジェイムズなんですね。知らないですか。ぼくも知りませんけども。それで、

弟なんてほっぽっていいですけど、そのコンテキストってやつですよ、問題は。ウイリアム・ジエイムズが十字路の仮説っていうのをですね、立ててるんですが、これコンテキストのことですが、コンテキスト、存在関係だからって訳されますが、つまりですね、精神と身体の交差する、あ、こつちが、じゃあ精神で、こつちを身体としましょうか。これの、交差、してますよね、交差点が、いろいろと言っちゃいますが、ま、(私) ってしときましよう。個人が形成されているわけですね。やつと哲学的になつてきましたけど、前に、哲学的に面白くないって言われちゃったことがあるんですけどもね、誰かというのは名前は匿しますが、火曜日のゼミの担当してる相川家弘教授です。冗談です冗談です、はい。それでですね、このコンテキストについての話が余談だったんですけど、本題は何かという、なんでしたっけね、あはは。あ、先生笑っていない。まずいですね、その、じゃあ、本題募集中です。いや、冗談冗談、ウソウソ、ウソですよ。あの、じゃあ、そうですね、枕が長いと怒られちゃいますからね。もう充分長いですか。いや、そこを何とか堪えて堪えて、どうかお平らに。それで、えつと、さつきもそうだったんですが、あの、眠いです、はは。そう、最近どうも眠いんですね、ええ。そんなもんで、レポートが

捗らない。こんなことしてる場合じゃないですよ。それでもやらなきゃならないんだから参ってしまいます。レポート、書くことないですし、はやく題材探さなきゃいけない。書いてられるかって感じですよ。書かないとまずいから、まあ書きますけどね。眠くてかなわないとも思いますけどね。せめて締め切りに間に合わなくてもどうにか書かなくちゃと思つて頑張ってますよ。まあ、それですね、うとうとしてるとですね、どうも身体が揺れるでしょう。あれ、みつともないですね。やですねやですね。誰でも眠たくて仕方ないよつとときがあると思うんですが、こういうの一言で言うんですね、うとときって言うんですが、知つてましたか。まあ、あんまり辞書なんて見ないでしょう。最近の辞書では載つてないんですね、何故か。あ、見てくださいよ、ちよつと、先生が居眠りしちゃあいけないと思うんですが。起こすのも可哀相ですし、説明材料にでもなつてもらいましょう。夢に落ち損ねたからつて単位を落とされたら嫌ですもんね。それはさておき、この、いま言つたうとときっていうの、語源は不詳ですが、まあ、もちろんうとうとするのうとうとは近いでしょうが、他に似たような言葉に疎疎しいとか烏兎、烏兎忽忽ですね、こういう言葉があるわけで、賢い皆さんならお解りの通り、ぼくの推測では

ですね、この疎疎しい、親しみを感ぜないって意味ですが、疎疎しさを感ぜる、或いは、烏兔忽忽、こつちは月日が立つのが早いつて意味ですけど、こういう言葉のあいの子、言葉が悪いですか、まあ、掛詞ですね、掛詞ではないかという風に思われるんですね。

つまりですね、総合すると、ああなんだか眠いなあつてとき、周りの音が煩く感じる、それに一度うとうとしたすと、あつという間なわけで、こういうのを掛詞にして表したんじゃないかなと思います。例えば、眠うい眠うい時、親がやつて来て、早くお風呂に入りなさいなんて言うと、普通の時に言われるよりも、断然苛立たしい、で、大声上げちゃつて、ああもうわかたつたから、なんてやつちやうわけですよ。皆さんみたいなやんごときなき方には無いかもしれませんが、まあ、それから、うとうとしているとですね、もうまさに夢現ですよ。夢だか現実だか判らない。幻覚幻聴大入りですよ。こういう時は、運転しちゃ駄目ですよ。まあ、皆さんみたいな高貴なお方は、牛車ですか。馬車ですか。だいたい夢と現実なんてそれほど境界のはつきりしたものじゃないんでしょうね。あ、その方、デカルト持ち出して来られてもぼくは知らないのですけれど。あ、デカルトの話がしたい、そう仰言りますか。それでは、ぼくは役目を無事終えたということで、終り

ましようか。あ、過剰な親切で、時間を延長させられてしまいましたが、じゃあ、もう少し、こう、何か話でもしておこうかと思えますけど、皆さんは、宮沢賢治って知ってますか。え、喋り方が何処かで見たようだ、そう仰言る。気のせいですよ、気のせい。そんなことより、宮沢賢治、雨ニモマケズばかり有名ですが、あれだって、別に遺書ではなくて、ただのメモ書きだっていうのが有力な説なんですよねえ、はい。わたくしという現象は仮定された有機交流電燈のひとつの青い照明です。あ、ちよつと、そこで合の手ですよ、あらゆる透明な幽霊の複合体です。知らないんですか。それは、失礼しました。ええ、ええ。青い照明、

これ、別に田舎の方によくある薄気味悪い青い街燈のことじゃないですよ。見たことないですか。そうですね。まあ、別に、ぼくだって、批評家でも詩人でもないですから、適当に話してますけど。知らないんなら、まあ、ちよつと、せめて風情でも感じてもらいましようか。ぼくの帰宅道の風景でも話しておきましょう。すつかり日暮れた頃に大学を終えて家路に着いた時です。地下鉄の駅から地上に出ると、今にも雨が降り出しそうな湿った重苦しい空気が漂っているわけです。地面を見れば、もうすでに濡れた痕が現れている。大通りの交差する駅前交差点にはですね、大

勢の帰宅者達が信号の色の変わるのを今か今かと待ち伏せている。待ちかねた女性が右折車輛の切れ目を忍んで走って行くのを素知らぬ顔をして待ちぼうけの振りを見ながら見ている。信号の色が歩行許可を示すと、決壊したように人の流れがどつと横断歩道を渡り始めた。ぼくも、その流れに混じって、横断歩道から落ちないように慎重に道路を渡っていく。高速道路を支える大きな柱の傍まで来ると、地面の色が変わっているのを見た。高架下にはまだ雨が染み渡っていないようだった。明るさを失った通りには街燈が灯っていた。

青白い電燈の光がちかちかと明滅している。同程度のリズムで、街の風景もぼくの瞳の中で出たり消えたりを繰り返している。薄曇りの空は、いつの間にか、ふくよかに黒雲を堆積している。今にも雨が降り出しそうだ。

泥の染みだ揃いの服の少年達が小路目掛けて駆けてゆく。野球の結果を口口に祝ってみたり、呪ってみたり、少年達は夏の盛りを報せている。

かれらの背を眺めている裡、雨脚のひたひたと近寄ってくる気配をぼくは見た。光景を絶えず反射するビルの街が波に揺れている。蕩揺の街に強烈な皮肉を叫ぶ魚屋とやり返すその客の音が聞

こえてきた。大通りからいっそう暗い路地へと入る。物珍しそうに和菓子屋の陳列棚を覗く外国人を通り過ぎ、過剰に置かれた自動販売機を横目に見る。汗ばんだ背中が鬱陶しい。実のところ、季節の変わり目などよく判らない。しかし、暑い限り、いまが夏なのだろうとは思っている。同じように、いまは二十一世紀だとも考えている。しかし、いまがいったい何時頃なのか判らない。疲れきっているのだ。腕に巻いた時計を見る気にもならなかった。店仕舞いを始めた八百屋の諦念知らずの客寄せ声を常と同じく素通りすれば、もうすぐで安アパートへ到着するだろう。目印代わりに、角には利用者など居そうにない避妊具の自動販売機が設置してある。見る度にぼくと同じだと感じる。田舎のバス停や、薄暗い商店街の金物屋だ。大学生の万年筆だ。乗り遅れるより以前に暮らしが遅れている。進歩主義を知らない未開社会だ。レポートの書き方など習ったことがない。習うより做えとでも言うのだろうか。盗人を禁止して泥棒を許すのか。歩き方だって親に教わるといふのに、自立がほんとうの意味で自律だと考えている学生と同じなのだ。生活の手段と趣味を重ねるなど変質者と何一つ変わらないはずだ。しかし、例の自動販売機が見当たらない。撤去されたのだろうか。道を間違えたのだろうか。一つ前の交差点ま

ではいつもどおりの帰路だったはずだ。振り返れば、街灯一つ無い路地がやや曲がりながら伸びている。慌てて、腕時計を見ようとした。しかし、空間を時間に見立てる癖はあっても、時間を空間に仕立てる癖は無かった。所詮は数分だ。雨垂れの音が強くなり始めた。鞆に手を伸ばして、すぐに手を引っ込めた。所詮は数分だからだ。

久堅の雨粒降りかかる頭を掻き、いまやって来た路を戻ろうと思った。疲労のせいだろう。疲れていると気付かぬ内に身体が動きなど頻繁に起こることだ。さつさと傘を取り出せばよかった。雨が激しくなってきた。昔の映画みたいだ。飛鳥川アスファルトが白んでいる。窪みはプールだ。いその上ラール・プール・ラール。千切れたポスターが流され、排水口の蓋の上で踊っている。言葉が崩れ、意味を失くしつつある。人の名前だったその一片が千早振るたつたいまはただの紅色した紙切れ同然だ。玉櫛笥箱の裏に野良猫が停泊している。何もかもがあえかな気がしてくる。猫のどのよい声が雨音に掻き消されている。雨に濡れ、小さな交差点に立ち尽くしていると、背後から白い光が差してきた。群玉の車が走ってきたのだ。さばえなすカーステレオから流れる音楽が鼓膜を叩く。端に寄り、小さくなってすれ違ふのを待つて

いる間、途端に羞恥心が沸き上がってきた。野良猫までもが走り去っていく。徐行する車のウインドウにはぼくの顔が入り込んでいる。窓はぼくの背景のうら寂しい街をも閉じ込めていた。しばし、ぼくは窓を眼で追いかけていた。

さつきやみ暗くなった街が窓の中を汀って行く。上衣の襟を正し、窓を伝う雨粒を瞞めた。街の中に浮かぶ自分の姿が見える。街燈が現れる度に姿を消し、暗闇がやってくると浮かび上がるその顔は些し病んでいるように見えた。ガタガタ音を立てて駆けて行く。ときどき「all a glory」を歌う馭者の声が聞こえた。

「こんばんは」

突然の声に驚き、身体を強張らせる。窓硝子の奥に薄ぼんやりと白髪白髭の人が映り込んでいる。ぼくはゆっくりと振り返った。「この馬車に乗るのは初めてかね」落ち着いた声だ。「軌道を走るなんて今どき珍しいだろう。わたしがあれくらいだったときは、珍しくはなかったんだがなあ」

老人は窓の外を指差している。ぼくは再び振り返った。窓の外には子供たちが走り回る姿があった。子供達の顔には花が咲いていた。ちょうど鼻のあるところだ。紫陽花だったり、向日葵だったり、種類雑多な花を咲かした子供達がはしゃいでいる。次第

に、子供達に組み分けが見られ始めた。梔子や百合、睡蓮の子供達が百日紅、朝顔、鳳仙花、向日葵の子供らに追われている。さらにその後ろを芙蓉の子、鳥兜の子がクスクス笑いながら追いかけていた。ぐるぐると追いかけてっこをして遊んでいるようだった。

「楽しそうだねえ」老人がのんびりした口調でそう言った。

駆け足で飛んで行く街並み、それを背景にして遊びまわる花の子供達、この光景を懐かしむように微笑む老人、馭者の歌声がそれらの風光を色着けていた。ぼくは眼をしつかりと瞑った。子供の笑い声が遠退いてゆく。馭者の歌声も色褪せる。老人の衣擦れの音が寂しそうだった。

「すみませんが、うちの子を見ませんでしたか」

窓をノックする音がした。ぼくは眼を閉じている。

「さあて、あなたのお子さんはまだこちらへは来ていないのでしよう」老人の声だ。「もう少し待たれてはどうかな」

「どうやら、そのようですね」

ぼくは細く眼を開き、声の方を見た。文字通り真つ青な苹果頭の男が立っていた。隣では、ハンカチを挿んだ桃色の苹果婦人がシクシクと泣いている。二人のかげは徐徐に街の埃っぽい風の中に消えていった。男の頭は一口ほど嚙られていたようだった。

「せっかちなご夫婦だ。きっと子供はベッドで寝ているだろう」

老人がやや呆れた口調で呟いた。「酔っているんだろうな」

「酒の話ですか」

声は、車の中から聞こえた。ぼくはしつかりと眼を開け、辺りを見回した。

「なあに、酒に限らんさ」

「つまらないですなあ」

声の在所は老人の近くのようにだ。

「ぜひとも注いでもらいたいものです」

確かに老人の足許からだった。ぼくは老人の脚の間を注視した。

脚の側には大きな鞆と酒の瓶が一本置いてあるだけだった。

「酒の代わりに新聞をあげよう」老人が俯きながら言った。

「文字じゃあつまらない。あなたのご友人の江利羽博士、あの亡くなった、あの人の死に際を聞いてから、どうも迷信深くなっちゃまってね」

「そうかい。それじゃあ、ミキサーにでも掛けてからならどうだい。名簿も付けとこう」

「しつかり掻き混ぜてくれるなら悪くない話です。新しい並べ方を心待ちにしておりますよ」

「あの、失礼、申し訳ないですが」ぼくは、もごもごと曖昧な口調で話しかけた。「その、お話をなさっているようですが」

老人は俯いたままだ。寝惚けていたのだろうか、ぼくも老人も。

「ああ、失礼」老人は欠伸をした。「些し、うとうとしていてね」

「あの、いま、お話されていたようですが」

「確かに、していたよ」老人はにこやかだ。「付き合いの長い奴だがね、いつも紳士みみたいな態度なんだ」

「その、姿が見えないようですが」

「何を言うかね」例の声だ。「ここに居るではないか」

コロコロと玻璃罎を指先で弾く音が聞こえた。ぼくは壇をじつと睨んだ。

「やあ、御機嫌好う」

瓶の中に人が詰まっていた。シルクハットまで被っている紳士だ。おそらく飛びきりと思われる笑顔だった。

「狭くはないのですか」

「快適だよ」瓶詰の男は懐から煙草を出した。「何しろ、おいらの遠縁にやあ樽人間てのが居るが、ああいう手合に比べたら快適快適、祖にしてなんとやらだ」

「はあ、葉山の話でしょうか。後味悪いですね」

「いったい誰が偉いさんの別荘の話なんてしたかね」瓶の口から煙がぶわっと飛び出した。「君もそんな極枯めいた身体なんて捨てて、この透き通るような素晴らしい身体に乗り換えたらどうかね」

「あの」ぼくは目の前の瓶詰男の名前を訊こうとして口籠った。

「おいらの名前かね」瓶がゴトゴト音を立てて揺れた。男が襟を直そうとしたからだ。

「かれは笛吹君だ」

老人が割って入って来たためか、笛吹というらしい瓶詰の男が吸い殻を外に投げ出した。

「それで、笛吹さんはどうして瓶に入られたんですか」

「入られたも何もないね」少し機嫌が悪そうだった。「さつき、君は窓の外で子供が遊ぶのを見ただろう」

「ええ、確かに、見たような気もしますが、あれは寝惚け眼に夢でも見ていたような気がします」

「おいらもあれと似たようなものさ」瓶詰の男笛吹の顔が大きくなったり小さくなったりした。「窓の外を、こう、じいっと見てみると向こうに映る自分が本当に向こうに居る気がして来ないかね。湖面に揺蕩う月かげの方が美しいと思うのは決してロマンチストだけではないはずだ。或る晩に部屋の中で、酔っ払ったおいらは

このボトルをぼけつと眺めていた。わずかにボトルに映る自分の顔の方が本当らしく思えた。そしたら、もうそれっきり、こうなつた」壇の縁に身体を近付ける度に、笛吹の顔が縁に沿つて歪んだ。「こう見えて、身体はあつてないようなもんだ。いいや、無いとはつきり言つてもいいかもしれない」

「かれは、魂を硝子の壇に抜かれたのだよ」老人が付け加えた。「わたしは、浜辺を散歩している時にかれを発見したのだ」

老人は海岸の近くを散歩するのが日課だった。潮風を浴びるのが好きだった。勇魚取り海辺に香る潮騒に老人は心安らぐのだった。或る日、老人がいつもより早く出かけたのは浜に打ち上がった鯨を見物に行く為だった。朝早くなら人は居ないだろう。鴉照る浜に朝陽が差している。小波の寄せる様が白白しい程だった。防波堤の切れ目からお目当ての物を見つけると、階段を駆け下りた。赤ら引く朝の浜辺の白妙に射千玉の鯨打ち上がる景色見にやつて来た老人の予想通り、霜黒葛来る人の姿無く、老人は矢も盾もたまたらずに砂の上を急いだ。老人は子供の頃から好奇心だけは旺盛だった。妹が手を取りしどころか、芋を手を盗りし人柄だった。畠の傍を通れば、必ずと言つてよいほど佯いた。天飛ぶや盗りし野菜を嚙りながら、街の方へ行ったものだった。老人は乗り

物に乗るのが好きだった。片糸の省線列車に只乗りすることで退屈しのぎをしていた。窓に映る自分の顔をぼんやり眺めていると、少し大人びた風に見えた。学生となつて都会へ引越したとき、むかし取つた杵柄で、うっかり切符を買い忘れることがあつた。しずたまきキセル乗車を悪びれて見る車窓は苦苦しかった。根蓴菜の窓に映る気色に幼心を見ていたのに、烏羽玉の憧憬が拷綱の光に上書きされてしまふようだった。露霜の飽きが来て、次の駅で降りた。高知るや空には水下方鯨が飛んでいた。雲居なす交差点を見おろすように御心を広告が設えてあつただけだった。ありさりて老人は海岸へ降りたのだった。本物の鯨を見るのは初めてだった。老人は鯨にそろそろと近付き、驚き上がった。どくどくと動いているのである。黝い皮膚が波を打っている。唾を嚥んだ。曲がり始めていた腰を低くして顔を近付けた。ガスが漏れるような音がした。鯨の表皮に耳を付けようとした。老人は眼を瞑つてゆつくりと顔を寄せた。触れたか触れないか、老人の鼓膜を轟音が貫き、一瞬遅れて生臭い液体が押し寄せてきた。老人は血腥い塊に圧され砂浜に倒れこんだ。葱緑の海藻を握つたまま立ち上がるうとすると、頭に硬い物が中つた。

「なんだいったい」

老人は身振り手振り織りませて経緯の細細としたところまで熱心に語ってくれた。老人は手にいつの間にか硝子瓶を握っている。

「やつとか」硝子瓶の中から声がした。

瓶詰男が、やつと終わったか、と言ったのであった。

「それで、鯨の腹の中に居たおいらが飛び出してきたというわけだ。実に息苦しかった。と言っても、精神が、だがね」

「すると、君は長いあいだ、たったいま打ち上がった鯨が破裂するまで胃の中に居たのかね」

老人が尋ねると、壇の中でふわふわしていた男が老人の眼をじつと瞞め、溜息を吐いた。

「ああ、まだ続くのか」

「いや、君の旅は終わったよ。今日からはわたしが面倒をみてやろう」老人は瓶を爪で弾いたり、揺すったりした。「妖精の貴族だ」ろうか。早起きは何やらと言っからね」

「のんびりしてないで、周りを見たらどうですか、御老人」

瓶入り男に従って、老人は周囲を見回した。

「いや、これは、随分とひどいね。酸鼻を極めると言った具合だ」

「早起きは酸鼻の極と言うのではありませんでしたかな」壇の男がにやつとした。

「そうだったかな。それより、君は、名は何とこのかね」

「おいらは笛吹と言います。かなりの田舎者ですが、先祖はかの神の足凳の在る島で生まれたのであります。虐遇と迫害とに懊悩し、禁責を恐懼れた御先祖は瓶に心ばかりを封じ込め、それが環り巡って、おいらへと承継されたというのが事の次第、いまこの身体は天分できて、靈魂ばかりのこの天性、豊穡な食糧とは即ち精神の食物に当たるので、それとはつまり、潤沢な言葉に他ならぬ。嗚呼悲しやな悲しやな、悲しき南回帰線ですよ、御老人。

或る日、気が付けば、おいらの視界は盲、いや失礼、真暗だったの御座います。菊も涙、加答児も涙、あれもこれも家庭の事情」

瓶入り男の笛吹は、パツと算盤を取り出し、それを弾いて音頭を取り出した。

「Ladies and gentleman, and おとさん、おっかさん。 This is Mr.Usui made in Japan pachinko country. I am No.1 boy, too much tehu-tehu san. 御 old man 旦那の御名前何アンてエの」

「ぼくは喃田ともうします」

瓶詰の男の囃子に乗って老人は壇を持ちながら小躍りした。

「あなたのおなまえ何アンてエの」二人は一緒になって唄っている。「しょぼりと迷子が飛び込んで、何を訊いても曖昧で、気が付

きや目の前硝子窓、ここは何処だと訊かれたら、馬車鉄道の客車だよ」足を降り出したり、引つ込めたりして陽気にしている。「あなたのおなまえ何アンてエの」

空き瓶を持った老人が朗らかすぎる顔をぐっと寄せてきた。

「尾張です。尾張栄介です」

ぼくは、沈黙に耐え切れず、窓に映る老人の厳しい顔をぼんやりと眺めていた顔を振り向いて、唐突に名を名乗った。しかし、老人は堅い表情を一縷も崩さずに真白な髭を指先で撫でていた。

「あの」ぼくは、因由無く、諦めずに声を掛けた。「なぜ、馬車に乗っているのか、判らないのですが」

老人は、懐を探り、黄色い紙片を取り出した。車の外の馭者は、何か歌っているようだったが、雨音に掻き消され、何を歌っているのか判らなかつた。

「これを観に行くのでは無いのかね」

差し出したその紙には、何も書かれていなかった。客車の椅子の下に転がり込んでいた空き瓶が、足許を転がっていく。同じ頃に、軌道と車輪の擦れる音が響いた。

何も書いていませんが、と口に出そうとした時、老人が先に声を発した。

「君も有っているだろう、切符くらい」

窓を叩く音が烈しくなつた。稲光が差し込む。ぼくは、慌てて服を叩いた。記憶喪失にでもなつたのかもしれない。老人が何か話しかけたようだったが、ぼくの耳は雷鳴が入ってくるのを拒めなかつた。老人の愛想笑いだけが、虚しく届いた。ぼくは、頭の中なかに堆積したばかりの雷光を幾度も幾度も掘り起こした。記憶の中で白い光が明滅するたび、老人の髭の中で優しく撓む口が怖くなつた。

「それなら、わたしと一緒にいこう」老人が見透かしたように微笑みかけた。「ついでにわたしが色色教えてあげよう」

ぼくは、有りそうもない切符を探るのを止め、シャツの胸ポケットを掴んだ。シャツが汗に濡れた身体に張り付く感触がはつきりと感じられた。

「あの」ぼくは覚束ない口振りで、断ろうとした。「ありがとうございませす」

老人は、微笑んでいる。水溜りの中の暗滄の空が弾けた。車輪に跳ね上げられた水滴が音を立てて窓に衝突して余計に微塵になつた。往ったり来たりする硝子瓶の音が徐徐に走行音と融け合い出してきている。ぼくの思考も少しづつほつれだし、意味の無い

切れ切れの単語と混ざり、編み直され始めた。窓の外を見ようにも、簡単な組み合わせが判らない。ぼくは、夏は案外早く終わるだろうと思った。

「ありがとうございます」ぼくは断ろうと思った。「ほんとうに」
「気にしなくてもよろしい。料金なら、この馬車は前払いなのだ
し、君が気に負うことは何もない」

ぼくはそれから老人の顔を窓越しにちらちらと見た。窓にときどき花弁が張り付く。老人は、大きく溜息を吐くと、床を往来する壇を拾い上げた。

「もうすぐ着くだろう」

老人は壇をチャカチャカと軽く叩いている。窓を伝う雨の糸が途切れがちになった。ぼくは、うとうとし始めていた。

「尾張君と言ったかな」瓶の呑口に向かって口を細めている。「こちらから礼を求めるのは不躰だが、ひとつ頼みを聞いてくれないかね」

馭者が停車を報せた。車輪と線路が擦れる。馬の蹄が地面を踏む。老人は返事を待たずに席を立った。

「じゃあ、ついておいで」

外は広広とした草原だった。弱弱い風がそよいでいる。雨の

重みに耐えかねた葉が首をもたげたのか、バサバサと葉に何か打突かる音がした。雨天はわずかに康らぎ、小さな雨粒だけが路面に降り注いでいる。老人は帽子を被り、馭者に二言三言挨拶をしてから、安普請の停車場を出た。馭者は鞭を打つと、暗夜へと消えていった。姿は消えても、音だけはいつまでも響いていた。老人は草原の方へと歩き始めた。

「草むらに何の用があるのですか」

「まあ、ついてくれば判るさ」老人はなおも叢の中を歩いた。「もうしばらく歩くぞ」

ぼくは、服が濡れるのが厭だったわけではないが、やはり雨降りの原っぱの中に行くのは勇気が要った。ただでさえ汗ばんでいるのだ。表からも裏かも湿っては、何倍も気持ちが悪かるう。なるべく、老人の跡を選んで進んでいくことにした。それならば、勇気など特別必要ない。気まぐれに反り返った葉っぱをちよいと避ければいいのだ。狡知さも世渡りには欠かせない。老人はずんずんと草を掻き分けていく。ぼくは、恐る恐るではあったが、出来る限り素早く足を運んだ。これが誰も通ったことのない道だったら、まず歩かないだろう。街にいても人通りの途絶えた路など通らない。獣道以上の粗野な道など誰が歩もうか。しかも、気味

悪く夜露の滴る草原だ。道に迷うかもしれない。前後不覚に陥れば、我を失うだろう。街にいて、その状態に陥った人も見かけないでは無かった。後ろ暗い小路から出てきて、虚ろな目で舐りを垂らし、呼気乱した男が、大きな交差点のある大通りへと飛び出してくる。ただそれだけだ。それだけで都市の交通は乱されてゆく。まずは、歩行者から、それも勁い人間から、心を乱し、平静を失う。狂気の伝染だ。街燈と同じだ。あの電線だ。次に弱くも強気を気取っている輩が、もうこれ以上は耐え切れないと泡を吹き、卒倒する。仆れた人を運び去ろうと計画する奴が出てくる。手に持った携帯電話を、今か今かと待望していたのだ、振りかざし、正義漢振って見せてくれる。英雄気取りとはこのことだ。最も保護されるべき弱者は自分だということに気付いていない。糸の切れた糸電話が狂気を電信する。綿密に編まれた平面の都市計画がそれを受信し、言葉は玉突き事故を招聘する。絶えず受信される街路に横滑りする。座標は大いに狂い、不安定な遊歩道上の歩行者は気分を悪くするのだ。次々と汚されていく街路樹は呼吸を停止する。心肺蘇生装置を運んできた若者が樹に電気ショックを与え、老人がそれを止めさせ、自分の利用している銀行口座をいつでも現金自動預払機から操作できるように努める。会社帰り

の父親は大声を上げ、救急車に石を投げる。不通となった意味の交感係に鹹首が告げられると、一分の一の都市模型から子供達は手を引く。小言を言いながら片付けるのはいつも母親の役割だ。頽落した遊びに飽きた女性大臣達は高級車で男娼を追いかけまわし始める。小路に隠れた男娼は悲鳴を堪えて、後架を求めて止まない。ピュタゴラスの形をした交差路は存在しないのだ。しきりに唾液を飛ばしながら、女達は男娼の逃げ隠れた小路を暴く。男娼は狂気の裡に小路を抜けださなくてはいけない。もはや言語を喪失した人人は映像を高速道路に流すより無い。ハイウェイを流れてゆく大型貨物車に自らの史命を託すのだ。フィルムを満載した灯籠が目抜き通りを練り歩く。商店街の売り物が列を成し交差点へと流れ込もうとする。信号手はすでに沈没した。堆積した光線が実像を騙る。公園の無い街から浮浪者達がパレードを作つてやつてくる。交差点へと融合炉が運び込まれる。カメラを手にした人人は拍手喝采、交通規制を突破してゆく。映像画像が零れ落ちる。道路へと汚点を残す有象無象の順列だ。どろどろと蠕く有機体の都市を片付ける手は途絶えた。問わず語りの疚しさすら忘れたのだ。真夏の冬枯れを気にも留めない。針の通らない紙ではなかった。不意の一言の強烈さを感じなくなったのだ。すべての

話は流れ去り、娼婦を追いかけることを止めない愚者が片隅で嗤っている。やがて到着する霊柩車に親指を立て幸運を祈るのだ。電信柱を薙ぎ倒し、絡み合う人達に贈り物を選ばなくてははいけない。一冊に綴じた白紙の束が好かろう、闇討ちをする言葉の群れの秘めた驚きを計量しなくてははいけない。

「さあ、あれが目的だ」

老人の声に驚き、顔を上げようとしても、俯いたままだった。

「疲れたかね」

「いえ、すこし、ぼうつとしてまして」後頭部に手を当てた。「いえ、なんだか曖昧な、眠いというか」

「何にせよ、あそこに着けば一休みできよう」

おもむろに顔を上げると、深緑の原っぱの中に煌煌とネオンが輝いていた。老人は雪じものネオンライトの輝く建物を指差すと、今までより歩調を早めた。現代建築然とした劇場のような建物だった。複雑な意匠の外壁には大きな看板が多数掛けられていた。看板にはただ絵が描かれているだけであつた。布袋を被つた恋人たち、タキシードを来た蒲鉾板、黒く塗られただけ一枚、内臓を撒き散らした巨大な砲弾、椅子に腰掛ける椅子、人型の森、グラスの縁から垂れた千切れ雲、扉の外を徘徊する鳥と影に潜む少

女、夢の方向から走り来る機関車、空を飛ぶ勇魚、地球儀を割つた目玉焼き、空間を縫つて樹樹の表面を奔る馬、どれも宣伝の为一枚絵のようであつた。劇場と思しきその建築物まで来ると、老人は壁面に塗られた青空をノックした。入り口は晴れ渡つた空で、出口は夕暮れだった。青空が開いた。老人は帽子を取り、会釈した。

「ようこそおいで下さいました」

その些か耳障りな声の主は猫だった。二本足で立ち、ご丁寧に立派な洋装であつた。

老人は、懐中から切符を取り出すと、洋装の猫に手渡した。

「本日は貸し切りとなっておりますから、どうぞごゆっくり」猫は深深と頭を下げ、こちらを向いた。「お客様も、さ、どうぞ」

猫は斑模様を撫でまわしている。老人も手招きしている。

「さあ、尾張君も来たまえ」

「このわたくしボカティオが館長を務める当代きつての立派な劇場です。また、わたくしが座長を任されておりますカラシン一座の素晴らしい歌に踊りはここでしかお目にかかることは出来ません」猫はとことこと老人の方へ寄つた。「ただ、当劇場、なにぶん古いので足許にはご注意ください。急に揺れることも御座いまし

ようから」

老人と猫のボカテイオに続いて、青空の隙間に入り込んだ。劇場の中は薄暗く、蟲の集った電燈はせわしく点滅を繰り返している。天上のそこかしこに蜘蛛の巣が垂れ下がっている。ガサガサと何かが這いまわる音がする。床の隅に綿埃が転がり、軋む床はあちこちに汚点あり、毛羽立った絨毯は色褪せ、木片が突き刺さっているのが靴を通して判った。黄ばんだポスターが壁に貼られており、頻りに頭を上下するポスターの一群のいちいちには猫の顔が印刷されている。楽屋があるらしき方向からは猫達の睦言が聞こえてきた。老人とボカテイオと名乗った猫は恵比寿顔だ。

「以前お話ししたかもしませんが、わたくしども、むかし二千人百円の損をした若い紳士をです」

宵闇の如き館内に、どこからか、ボレロの韻律が鳴っている。

「おや、もうすぐですね」

「済まぬが、手洗いは何処だったかね」

老人は、きまりの悪そうな顔をして、四囲をきよろきよろと見回した。

「あちらの角を曲がったところですよ」ボカテイオは前脚を掲げた。「もうじきですから、なるべくお早めにお済ましく下さい」

「ああ、済まないが、その尾張君を案内してやってくれないか」「かしこまりました」猫は舌をちろちろさせて返事した。「先に鑑賞いただきましょうか」

老人は、軽快な音楽がうつすらと聞こえる中、暗闇をいそいそと歩いて行つた。蛾の死骸を踏みつけたことには気がつかない様子だった。

「それでは、尾張様、こちらへどうぞ」ボカテイオは振り返りざま言った。「余談ですが、当館では通常、後架のことはレトラスと呼んでいるのです。尾籠な話で恐縮ですが」

ぼくは、猫の白黒の斑模様の館長兼座長猫ボカテイオの後に続いて、寒氣のするほど広い劇場の廊下を進んだ。突然、勢いの強い風が吹いた。壁ではためいていた紙が剥がれ、暗い通路の中空を踊っている。黄色く変色した紙は、ぼくに、老人の差し出していた切符のことを思い出させた。資格も無しに、観劇などしてもいいのだろうか。

「お客様、浮かない顔をなさって、いかがなされましたか」ボカテイオが猫背越しにこちらを振り返った。「これから、せつかくのシヨウですのに。あ、そうでした、名前だけ名乗っておきながら、名刺を渡し忘れておりました」

ボカテイオは、そう言うと、服の上衣から名刺入れを取り出した。イタリアで取れた火浣布で出来ている上質な名刺入れで通販を利用して購入した、猫はそう説明して、真白な長方形の紙を手渡した。裏面を見ても、何も書かれていない。ボカテイオは名刺入れを閉まっている。ぼくは、すこしく気が動揺し、取り繕おうとして適当に札を述べ、手持ち無沙汰を匿そうとポケットに手を入れた。すると、指先に何かが触れた。探りを入れると、紙が入っているようだった。それを取り出すと、ボカテイオがくれたのと同じ様な紙であった。白い紙に何も刷られていない。

「おやおや、お客様からお名刺をいただくとは、ありがたいことです」

ボカテイオは、そう言いながら、ぼくの手から紙をもぎ取った。

「立派なものですね、これは」

ぼくは、白い紙をありがたがる感性が解らなかった。そこで、思い付いて、白紙の名刺に直筆で名を書こうとした。

「あの、サインペンか何か有りますか」

「サインペンなら有りますが」猫は怪訝な表情をした。「ゼンたい何に使おうというのでしょうか」

「いや、なに、その紙にサインでもと思ったのですが」

「せっかくの名刺にサインだなんてとんでもない」

一喝し、猫は激しく前脚を顔の前で振った。ぼくは、やつと落ち着いてきた鼓動がふたたび過ぎるくらいに活発になってしまい、口籠った。言うべき言葉を必死になって探した。頭の中の図書館を次から次からへ梯子した。荒唐しい運転、片手で地図を見て図書館を探す。狂惑する対向車をすれすれで避け、来るべき言葉の到来を待望した。ボカテイオの声が赤色灯を伴って背後から追いかけてくる。ハンドルを握る手が震え、ブレーキとアクセルの境界が曖昧になる。交差点に差し掛かったところで、事故が起きた。そして、ようやくぼくは口に出すべき言葉を発見した。移動図書館と衝突したのだった。飛び散った書籍の中から、ぼくは一冊を手に取り、呻き声を上げた。

「う、あの」

ぼくは、ようやく声を震わして何らかの言葉が出現する気配を感じた。しかし、声が出されそうになった瞬間に、地面が大きく揺れた。揺れの中で、ぼくは眼を瞑った。

「いやはや、遅れてしまったね。申し訳ない」

枯れた声だ。眼を開き、声の主を確かめた。教室に入って来たのは紛れも無く、喃田重治文学部教授だった。教室には、ぼく含

め数名の学生がそれぞれ座っていた。ぼくとあと二、三人の学生が居眠りしていたのだった。

「それでは、今日の担当の学生」教授は名簿をめくった。「尾張君だったね。じゃ、よろしく」

ぼくは、寝起きたばかりの頭を掻きながら、教授の退いた教卓へと向かった。今日の発表の準備などまるでしていなかった。不安を悟られぬようにいつもより背筋を伸ばして椅子に座した。なるべく椅子に沿った姿勢で座ろうとしたために椅子の上にもう一つ椅子が座っているようなかたちになってしまっているのが自分でもよく判った。やや緊張を解き、哲学的思索に耽ろうとした。急がねばならないのは、建設不備ばかりが原因ではなかった。準備していたところで、同じ状況になっていただろう。それっぽいテーマさえ提出してしまえば、後は教授が助け舟を出してくれるはずだ。焦れば焦るほど、現在の状況ばかりが頭の中を横切って行く。こうなれば、自虐自嘲で笑い者になりによく他あるまい。それか、シュルレアリストに倣って、自動筆記ならぬ自動発話に頼ろう。教授は確か芸術分野に興味を有っていたはずだ。哲学的思索という言葉だけが哲学的であったほつれ気味の思索の網をかながり捨てて始めの口上を無意識の裡に選び出そうと、深呼吸し

眼を閉じた。椅子へと背を凭せると、軋む音が曖昧な教室へと響き渡り、居眠りを止めない学生が喧しげに顔を上げた気配がする。椅子に背を任せすぎたためか、後頭部を黒板に打突けてしまった。

「大丈夫かね」

教卓には学生がひとり腰掛けている。ぼくは、喃田教授の隣、最前列で、ウエハースの机に顔を強かに打ち付けていた。砕け散ったウエハースがチョコレートの上に落ちた。チェリーソースがパイ生地天井から滴り落ちてくる。教授は時折それを舐めながら、話を聴いていた。

「……ですから、私達が一般に言うような夢の世界というのは、幾つかの意味を有ち得るのです。しかし、その点に置いて、われわれは、その言語論的多義性の効用の前に、比較的簡単に意味論的錯覚状態へと、端的に換言すれば、それは絶対的矛盾的同一性に於ける常識的学的困難へと還元される様な存在の命題とも解されるべき肯定的可能性を秘めた命題を有ち得る状況なのですが、この純的錯覚の恐るべき、否、唾棄すべき悪用をこそ、われわれの記述された常識的知識から速やかに抹消せねばならないと言うことをも述べておかねばならないことも、ひとつの私的な、親密さとも言われるだろう、この術学的施術のアポロンの自己創成、

乃至はギリシア伝来の現代語用論の放埒或いは投棄、被投棄の垣根の怪しさに秘められた歴史の錯誤的裏付けからの脱出、これは飽くまで現在認められ得る生活的態度の一面なのですが、即ち、シーニュ、ブリケット・ド・クーボンの初めて指摘したコンテクストにおける、シーニュとは、成程、畢竟われわれの意味する言語盗用説のビュセツ的、若しくはカトラン的な文学の人間学的要素の、デューウイも指示したように、人間学的色の色の可能性をも、われわれはその言葉によつて包含せねばなるまいとも思われますが、一方で、ブラン・ダムール、カレンザーナ、フィウモルボらのコルシカ学派のバルーズ・デザラヴィの道徳的倫理学的科学論の浅見から来る、誤った、プラグマティックの過誤、これはわたくし個人としても慙愧の念に耐えぬところですが、いまはその込み入った、雑念に近い、泥濘化した危うき状況は、やはり何と言つても新カント学派もそうですが、或いは現代の科学者が弄ぶ半端な、もはや断片でしかないような、学問に対して誠実さを有つことを自負する者ならば、看過出来ぬ者は居ないであろう、況んや、われわれ、究竟、学問の徒と言わざるを得ぬ、そして、言われざるを得ない、真実、学徒として矜恃と誇りを有つわれわれならば、忌避せねばならぬ、余程、實際的に難多く有る所

では御座いますが、それでもなお、われわれは、前向きな進歩主義を、オブティミズムの一形態として捉え返し、なお一層の前進を行うのであつて、それでなくても、われわれは乳の固形物を火で炙つたような、泥の如き基礎の薄弱さ、軟弱さを明るみに曝し、更に、いま述べたように、全体的な錯視の矯正をばせねばならないでしょうから、取りも直さず、今一度の転回を、そう転回こそが我我を繋ぎ留める羈、我我をこの網状組織然とした有機的キザハシ構造の先験的瞭解を齎しうる画期的前進を象徴する飛翔を担うであろうことが今や自明となりつつある或る特殊の様相をデカルトの悪魔の裏返しと成り得べきかのパラケルススらの医学的デアアレクテイクなるを手段として薔薇十字を踏み台にせんと誓わねばならぬでしょうが、いや、併し乍ら、専ら我が為すべき転回こそハイムへの帰還を指示するであろうことこそが、今の現在のリゾーム状錯綜過程の永遠の人間学的考察に於ける構想力のテーゼが一層の意義を有ち、かてて加えて、この都市の人間心理の機微を企図しているのですから、思索の全景をいま観んとする選民思考の悪しき徹底化された階層のポエトリックなデカダン風味のクリームを添えた気紛れ、そう、これこそが斯くも美味なれりとの噂を、空談こそを、展開するのであつて……」

教卓に座して、講義を行っていた学生の口吻は熱を帯びはじめていた。手を振りかざし、口角に泡を溜めている。ぼくは不意に後ろを振り返った。講義を熱心に聴いていたのはどれも教授と、思しき老いさらばえた人達であった。つまらなそうな顔をして、携帯電話を触ったり、壁から羊羹を千切ったり、思い思いの暇潰しに熱中している。天井から降り注ぐマーマレードを手に溜めて目の前に居る教授にかけたり、仕返しに角砂糖を一握り投げ返し、それを見ていた周りに居る教授達も加わり身体中甘味まみれにしている一団が居たかと思えば、床のホワイトチョコレートで出来た通路部分に湯気の立つコーヒーを注いで、穴を開けてクスクス笑っている者も居り、中座しようとした教授がその穴に嵌まり、下の階から引つ張られている。水飴の窓を舐め回している教授、抹茶味の黒板に頭から突っ込み痙攣する教授、カクテルライトを一気飲みして気絶する教授、その様な中に居てさえも教卓に座っている学生は興奮し、顔を真っ赤にして何やらを喋喋している。真っ赤になった顔が徐々に固まっていき、蟹の甲羅のように変貌したかと思うと、黒眼が外に飛び出し、振り上げていた手指が一瞬にして溶け、蟹の爪の様になった、口からはブクブクと泡を吹いている。鉄を噛み合わせ、立ち上がった。黒板にめり込み、失

禁していた教授を爪で挟み込む。教授は悲鳴を上げ、蜂蜜になつた。教授達が一斉に悲鳴を上げた。

「外へよう」

喃田教授が、そう言つて、ジャムで濡れた上衣を脇に抱えて歩き出すと、ぼくもそれに続いて席を立ち上がった。眼前で蟹になつた学生が教室で戯れていた教授達の方を振り向いていた。教授達は慌てて、穴に詰まっていた教授を無理やり押し込もうとしていた。頭からコーヒーやら紅茶をかけられ、挟まっていた教授は泣き喚きだす。蟹は人の形をしている下半身で、そこへ駆け寄ろうとしている。下階からの援護もあつて、どうにか穴の中へ教授を落とし込むと、空いた穴から続々と教授達が飛び降りていった。蟹は穴へ入るうにも脇腹から伸びた脚が邪魔して入れなかつた。

「蟹は、普通、自分の甲羅に似せて穴を掘るものだ」

喃田教授が、教室を出る前に、そう呟いた。ぼくは、ちらりと蟹を振り返つた。しかし、蟹は天井を突き抜けて来た梨に押し潰されて、甘つたるい講義室に似つかわしくない蟹味噌をぶち撒けていた。口許からカブカブと泡を吹いていたのだった。

気分悪くして教室の外へ出ると、廊下を塞ぐようにして立っていた学生の集団が立ち話をしているようだった。

「男の学生がカステラを手に気障な顔をして
いる。」

「女の学生が寒天の表面を撫でている。」

「もう一人の男が、寒天に苺のシロップをかけて
やった。」

女は空返事だった。冷ややかに指を滑らせている。

「男が声高に言った。」

「女の頭にメイプルシロップが垂れてきた。」

「男はカステラを握りつぶした。」

「もう一人の男の方が、靴から取り出したサイダーを、痙攣男の
口に、流し込んだ。」

「男の痙攣が和らいだ。」

「

「男の痙攣が和らいだ。」

「男の痙攣が和らいだ。」

「女の頭にメイプルシロップが垂れてきた。」

「女がメイプルシロップに溶け始めていた。男達は一斉に叫んだ。」

「痙攣していた男が言った。」

「サイダーの男が辺りを見回した。」

「笑っていた男が走って逃げ出した。」

「シロップとの境目を失った女が微笑んでいる。」

「痙攣が言った。」

「サイダーが頷く。」

「シロップが手を伸ばす。」

「サイダーの脚がいつの間にか林檎飴になっていた。」

「それを見た痙攣が引きつり笑いをする。」

「あの、喃田さん」ぼくは、前を歩いていた老人に声を掛けた。

「なんだか変じゃありませんか。あそこの人達、何を言っているのかわかりませんよ。見たところ、外国人じゃありませんし」

「ああ、最近の若い学生は、たいてい、ああだよ。」老人は生クリームの壁面に手を入れ、スポンジを一掴み取り出した。「最近は何かにつけてスノーバルだ、其際化だのと喧しく言われているのが、君は知らないのかね」

「グローバリズムですか。じゃあ、かれらは母国語じゃなくて、なにか外国語を使って話をしてたってことですか」

「グローバルじゃなくて、スノーバルだよ、君」

老人は、ゼリーの上を勢い良く飛び跳ねた。

「君も入ってごらん」ゼリーの中に沈み込みながら老人が叫んだ。
「そうすれば、わかるだろう」

老人は、ゼリーの中から、ぼくを見上げている。

「落ちればわかるのではないかな」

教授が、教卓から、そう言った。

「しかし、単位が落ちてやつとわかるなんてことは無いようにしてもらいたいね」

ぼくは、いつも座っている座席に俯せて、教授の講義を聴いていた。

「文学部は甘いというイメージを有っているかもしれないが、実際のところ、非常に、甘いです。大甘です。日曜日のパチンコ屋みたいですよ」

教授はひとり大笑いした。学生はみな沈黙を貫いている。

「じゃあ、抜き打ちテストでもしましょう」

この一言で教室にさつきまで無かったざわめきが起こった。みなそれぞれ暗に教授を罵倒していた。ぼくは、当てられないように、再び机に凭れ掛かった。

「はい、それでは、そのの、蔵部君にしよう」教授は端の方に座っていた男の学生を指名した。「十五番」

「一つの表象から他の表象へ、変化や移行をひき起こす内的原理のはたらきを、名づけて欲求という」学生はすらすらと宙を見て喋り始めた。「もちろん欲求がはたらいても、かならずしも目ざす表象の全体に、完全に到達できるとはかぎらない。しかし、いつもその努力から何かを得て、新しい表象に達することはたしかである」

「二十三番」

「そこで、失神状態から目ざめたとき、すぐに自分の表象に気づくことから見ても、たとえ意識はしなくても、目のさめる直前まで表象があつたことはまちがいない。じつさい表象は、自然的には別の表象からでてくるしかないのである、運動が自然的には、別の運動から出てくるしかないのと同じように」

「五十六番」

「創造された凡ての物がその各に對して又各が他の凡てに對して持つこの聯結もしくは適應によつて、單純な實體はそれぞれ他の凡ての實體はそれぞれ他の凡ての實體を表出する關係を持ち、從つて宇宙の永久的な活きた鏡となつてゐる」

「二十番は」

「實際われわれは、自分自身のなかに、何も覺えてゐない状態、

明確な表象がすこしもない状態を経験する」

「続きは」教授が訝しそうに訊ねた。

「いや、わかりません」

ぼくは、ゼリーの中を泳ぐ教授に向かって、はっきりとそう言った。

「うむ、それじゃあ、わたしの講義をそのうち聴いてもらおう」

ぼくは、しばらく考えた後、思い切ってゼリーの中に飛び込んだ。教授はすいぶん遠くを泳いでいる。

「すみません。すみません」

猫の館長兼座長が何度も頭を下げている。

「当館、なにぶん築年数の方がかなりありまして、本日は申し訳ありませんが、中止ということになってしまいます。もちろん、お代の方はお返し致します。本来ならば、美しく調和の取れた天上の音楽をお聞きいただいておりますところですが」

「いやはや、それは残念だ。わたしはせっかくお客人を連れて来られたところなのだが」老人が隣に立っている。「こういうことはそう何度も無い愉しみだというのに」

猫が何度も頭を垂れながら、出口まで送ってくれた。

「舞台が壊れたとあれば、仕方がない。すべては重力に任ざれて

いる」

老人は最後まで残念がっていた。出口は夕暮れだ。出口を脱けると、外は闇の水漬く草原だ。老人とぼくは、軌道を探して、草藪を経巡った。

「例の馬車でなくても、別のが通るかもしれない」

停車場は無くなっていった。

「もともと、あつて無いようなものだったのだ」老人は疲れたようだった。「曖昧だった。好奇心に駆られて少し勇みすぎた。久しぶりだったのだ、他人の水先案内人になるなんて。揺れやすい時期だから仕方がないとは言え、いや、事故ならなおさら仕方がないのかもしれない」

草原の中を歩きまわっていると、藪の中に椅子とも机とも区別のつかない物があった。老人は、机に腰を掛けては駄目だ、と言った。しかし、ぼくには、それが椅子に見えた。ぼくと老人は、協議して、それに坐ることにした。ぼくは、逍遙して疲れた身体を些しても休めようと思った。葉音心地よく、葉風が頬を撫でる。老人が突如叫んだ。

「鯨だ。鯨が飛んでいる」

気絶していた老人は、その声で眼を覚ました。血溜まりの中か

ら、立ち上がると、急いで空を見た。目の前に居たはずの鯨が居なくなっていた。

「なんてことだ。鯨が空を、ほんとうに、空を飛んでいる」

腹の裂けた鯨が青空を、高照らす陽を遮って、漂っていた。椀葉の臓物を、木の根のようにぶら下げながら、大船のゆくらくらくと泳いでいた。見ていると、ゆっくりと高麗にしき内蔵を地面に降ろし、濡れた砂の上に碇泊するようだった。さ丹頬う潮が辺り一面に降り注ぎ、濡れた砂浜の上に居た野次馬を赤くした。ボトボトと崩れ落ちてくる内蔵組織の脱落物が赤ら引く汀に次次洗われている。

「なんて気味が悪いんだ」老人の近くに立っていた男が唾きした。

「浜に鯨が漂着しているから見に行こうなんて言うからだ」

男の隣でへたり込んでいる女が泣いていた。

「だって」女は手許に落ちている未消化物を掴んで、男に投げた。

「こんな風になるなんて思わなかったんだもん」

「お前が朝っぱらから散歩に出たから悪いんだ」

男は、顔に中った鰯の溶解物を払いのけると、鯨から長く垂れ下がった内臓のひとつを千切り、女の顔に押し当てた。回りにいた連中は煽り立てている。「いいぞ」「おれはあいつに賭けた」「も

つとやれ」「それら、ここに麝香があつたぞ」「眼を潰しちまえ」「おれは五百だ」誰もが、鯨が空を浮遊していることよりも目の前の痴話喧嘩に熱中している。皆、血塗れだ。「右だ」「やった、もつと脱がせる」「おい、こつちに投げるな」「やり返せ」「容赦するな」鯨は虚ろな眼をして紅色の潮を噴いている。砂上には赤味掛かつた虹が見える。乱闘は果てしなく続きそうであつた。老人は苛立ち、腰を下ろし、砂を殴つた。

「静粛に」老人は一喝した。「静粛になさい」

講義室は聴講者で溢れ返っている。学生達は驚き、一瞬の間、室内は静まり返つた。またしばらくすると、学生達は思い思いの仕草を心遣りに始めた。ぼくは端の席に座り、うつらうつらしながら教授の似顔絵を描いていた。

「それでは、講義を続けます」教授は取り直すように咳をした。

「では、今述べたように、この頃では頓にスノーバリズムというのが言われているが、では、スノーバリズムとは何を云わんとするのかというと」

ぼくは教授の顔にむやみと影を入れるのを止め、それとなく曇硝子の窓を見た。窓に強く水滴が中つた。教室の床には黒い影が射しており、どこから甘い匂いが漂い始めていた。

それも、ひとつの

儂桐深花

「好きです」

そう言われて喜ばない男子高校生はいないだろう。まして相手は可愛い、いや、綺麗、だろうか。ともかくそんな相手に告白されて、健全な男子高校生である俺は、けれど歓喜よりも困惑が大きかった。

「え、つと、好きって」

オツキアイしたいってこと？

いまだき手紙で体育館裏……はあいにくこの高校にはないため格技場横の、どちらにせよ人目につかない場所に呼び出されて、他に何も無いと思うが。いや、正直手紙を見た時には少し疑った。シンプルなメモ帳に丁寧な文字のそれは、それでもどこことな違和感があった。その正体がこういうこととは、さすがに思いつかなかったが。

「……ごめん」

どうしたものと戸惑っていると下を向いたまま口を開いた。

「ごめん、いきなり、本当、迷惑、ごめん、忘れて」

いや、そう簡単に忘れられないっしょこれ。強く握られた拳を見て、さすがにそんなことは言えなかった。そのくらの分別は俺にだってある。

「ちよつと落ち着けて。小暮、だよね」

「あ、うん、はい」

「だから落ち着きなよ。人違い、なーんてことはこの期に及んでさすがにだし、あー、お前が、俺を好き、付き合いたいってことでいんだよね？」

「……やっぱ、迷惑、だよね、ごめん。忘れてくれていいから、それも身勝手だろうけど、もう、関わらないようにするから、本当、ごめん」

だから落ち着けての。

どーしたもんか。頭をかきたい。むしろ抱えたい。だけど今下手にアクションを起こそうものなら逃げられそうだった。隙をうかがっているようにしか見えない。ほんと、どーしたもんか。

「じゃあさ」

傷つけずに、せめて一番ダメージの少ない方法で。そう考えていたはずなのに、口から出た言葉は違った。

「付き合う？」

ぼかん、としたのは小暮も俺も同じだ。こういう時に限って顔に出ないのは得なんだか損なんだか。

「お前が本気なら、俺だってそれ無下にできるほどひどい人間じゃないつもりだよ？ それにほら、付き合ってるうちに—とかよく聞く話じゃん。とりあえず、つてやつだよ。よく知らないうちで断んのももったいないしよ」

よくまあこうもボンボンと言葉が出てくるもんだ。言った言葉は嘘じゃない。断るのにどうにも罪悪感があるし、どういうやつなのか知らない、知ってみたいとも思う。そう、本来なら一も二もなくオーケーする相手なのだ。

「で、も。お、俺、男……だよ？」

そう、問題はそこだ。

「そんなん見りゃわかるって。その上で言ってるの。それとも、お前、こういうノリで付き合うの嫌？ だってんならどーしよーもないけど」

言ってからしまったと思った。知らずキツイ言い方になっていった。どうやら俺も、相当混乱しているらしい。

小暮はうつむいたまま、拳を握ったままだった。どうフォローすればいいのか、いつそ今からでも断るべきなのか、自分で言う

のもなんだが珍しくぐるぐると考えていると、俺より先に小暮が口を開いた。

「そんな風に言ってもらえるって、思わなかったから。でも、気を遣って言ってるんなら、ありがたいけど、嬉しいけど、

………ごめん」

「や、その」

「ごめん、それでも、あ、まえたいて、思う。思っちゃう。俺からは、ごめん、それしか言えない、ごめん、ずるいよな」

ああ。

視線を合わせないままつむがれた言葉に、心の中で嘆息する。

本当にずるい。だって、そんなこと言われて。

「帰ろっか」

「ごめん、悪い、そうだよな、時間、もう、」

「あ、その前にメアドか。お前、何、スマホ？ QR撮れる？」

「……え？」

「だから、QR。連絡先ないでどーすんの。ああ、LINEあるならそつちでもいいけど」

「え、じゃなくて、だって、」

「だって、付き合うんっしょ？」

小暮はまたぼかんとする。そんなに驚かなくてもいいのに。仕方ないから無視してスマホを取り出して連絡先を表示させる。

「ほら、QRがムリならメモるんでもなんでもいいから」

強引に促すと目を泳がせたまま、たぶん頭の整理のつかないでいるまま、小暮もポケットからスマホを出した。アプリを起動させたようで、俺のスマホの画面に表示されたQRコードを読み取る。登録が終わったのを見計らってもう一度促して、俺が読み取る。小暮遥人。なるほどじっくりくる名前だ。シンプルなアドレスもなんだからしくって、思わず頬が緩む。

スマホをしまつて、戸惑ったままでいる小暮の腕を掴む。放っておいたらいつまでも呆けていそうだ。

「ほら、帰ろ」

まだ納得はしていないようだが、引かれるままに付いてきた。放課後も半端な時間になったとはいえうろつく人がいないわけではない。

何やってんだろ。

なるべくさり気なく手を離す。駅まで十五分弱。小暮の家は上りだろるか下りだろるか。そもそも電車通学なんだよな。会話、もつのかな。

……何やってんだろ、俺。

小暮の家は下りで五駅だそう。俺の家は上りだし、そもそも路線が違う。改札を通って階段の手前まで、というのが日課になった。といつてもまだ二週間もたっていないのだが。

元々部活に所属していない俺はいつも一人で帰っていたし小暮も同じような状況らしい。写真は個人活動が主で文化祭前くらいしか集まって活動することはないという話だ。

一週間と少し一緒に帰って得られた情報は他に図書委員会に所属してるだとか春巻きが好きだとかそういう、どーでもいいことばかりだった。

「女の子なら」

もっと上手くやれるんだけど。友達でもなんともなる。でもこれはひどく厄介な距離感だ。去年は同じクラスだったけど、話したことなんてほとんどないし。もしかしたら一度もないんじゃないか。あれ、じゃなんで。

「付き合ったこと、あるんだ」

「え？」

するすると思考を飛ばしている間で、思わず聞き返す。ああなんだ、声、出てたのか。

「まあね」

「モテそうでもないな」

「そんなことないよ。軽そうとはよく言われっけど」

「軽っ……確かに」

「納得すんなよ」

「悪い」

笑いながらで説得力もありやしない。そんなに面白いことだったのか。いまだ緊張しきりで話を振られて一言二言返すのが必死だったくせに。

重いよりや軽いほうがずっと生きやすいと思ってるし、だから実際軽く生きるのは俺の信条だ。いや、信条なんてもんがすでに重い。てきとーに、てきとーに。そんなこんなでてきとーにオツキアイもしてきたが、人並みだろう。とりあえず恋人が欲しいとか、そういう相手ばかりだったし。

「そんなもんじゃないの、イマドキ」

「といってもコイツはそういうタイプには見えないけど。」

「俺は嫌だな」

想像していたよりもずつときっぱりとした口調に、面を食らった。地雷でも踏んだか。でもすぐにハツとして取り繕うように言葉が続ける。

「や、その、付き合う、とか、結婚とかって、そういうもんじゃない、の、かな、って」

「なるほどねえ。んじゃあ、だからそんなめんどーのない男がいいやーってこと？」

「違……いや、あ、でも。でも俺、樋口とならずと一緒にいるしICUにも入りたい」

「何がどう「でも」なんだろう。意地悪な言い方をした自覚はあるがここまで動揺、いや、動揺なのだろうか。」

「……あ、や、あ、」

「うん、まあ、そうね……さりげなく俺がケガだか病気だかする前提なのね」

「そ、そういうわけじゃなくて、可能性の話で、」

要するにあれは、結婚したいという、あれ、もしかして俺、プロポーズされたん？ 逆プロ？ 逆？ ……何でもいっつか。できねーし、結婚。ああそうだ、できないんだ。

「じゃあ、このままオツキアイを続けて、何があるんだろう。」

いや、重いな、これは違う、重い。今までだつてそんなこと考えてなかつたじゃんか。なんだつてできとーなんだ。一々結婚を視野に入れてたらオツキアイなんてそうそうできやしない。ああそうか、小暮が言つてたのはこういうことか。

必死に弁明を続ける小暮がなんだか妙におかしくて、思いつきり笑つてやつた。さっきの仕返しだ。

「なあ、付き合つてるつてマジ？」

いつも通り教室を出ようとしたところで呼び止められたから、何かと思えば。

「三組の小暮」

にやにやと聞いてくるのは同じクラスになつて六か月で五回喋つたかどうかという相手だ。

「あつそれオレも聞いた」

声を潜めることもしないから当然のように話に入つてくるヤツもいる。改めて考えてみるとろくに話したことのない相手というのは結構いて、案外俺は軽くないのかもしれない。単純に、めんどくささが上回っているだけか。

「マジ」

真面目な顔で言つてみれば、からかつてやろうと構えていた連中は揃いも揃つてまぬけ面になつた。せーいっばい表情と声をくろう甲斐があるというものだ。

「つつたらどーすんの？」

ヘラリと笑う。

「つだよ冗談かよーマジ焦つたわ」

「つか流石にマジだつたら引くつて」

ま、普通そうだよな。からかわれるよりからかつてやろうと、それだけの話だ。

コイビトっぽいことは何もしていないとはいえ人目を避けているわけでもない。ウワサにくらいなるだろうかとは考え……てはいなかつたけど。だつて、はたから見れば、男子高校生が二人で下校していると、それだけなのだ。そりやそれまで仲良かったわけでもないんだから不思議に思うくらいはあるだろうが、それですぐ恋だ愛だと。オトシゴロにもほどがある。男女ならわかるけど。

ふ、と。はたと思ひ当たつたところで、ポケットが震えた。メール。珍しい、小暮からだ。

強引に連絡先を交換しても、小暮から連絡が来ることはめつたになかった。というか一度もなかった。俺が気まぐれにメールを送ったのが数回。ぼつりぼつりと返信があつて、日付が変わる頃にはお開きになる。夜更かしをしないやつだというのは、その時初めて知った。メールが苦手というより考えをまとめるのが苦手なのだろうことも。時間を空けて返ってくる文章はひどく丁寧で、でも頑張つて親しくしようとしているのが丸見えだった。頑張っている時点でダメじゃね。

そんな小暮からの記念すべき最初のメールは、件名のない「急に部活の集まりが入ったから今日は一緒に帰れない。悪い。」というただの業務連絡だった。たぶん、「悪い」を打っては消して消しては打ってしまったんだろう。改行も。最終的に改行なしになったのは、なんだからしくない。

……らしいって、なに。

そんなんわかるほど知らねーじゃん。一人で帰るのだった、たった二週間ぶりだ。気まずい沈黙のない十五分間が、それにしては妙に長かったのは、ただの気のせいだ。

人のウワサもなんとやらとは言うが、そもそもがからかいたかっただけで本当に信じていたわけじゃなかったんだろう、次の日にはもう何も言われなかった。

昇降口でなんとなく落ち合つて、そのまま歩きはじめる。それは、いつものことなんだが。

「どーおもう？」

「え、あ、うん……あ、えつと」

さっきから、明らかに上の空だ。なんだろう、よそよそしい。ようやくまともに会話が續くようになってきたと思つてただけど。

「あのさ」

びくりと震える肩に調子が狂う。イジワルしてやりたいのに。

「あー……なんかあつた？」

「なんか、つて？」

「明らかに普通じゃないっしょ。なんかあつたん？」

つくづく誤魔化すのが下手なやつだ。感情の揺れが表情に直結してる。

たぶん今、頭中で必死に言い訳を考えている。そしてもう言い訳のきく状況じゃないと気づいている。沈黙が長すぎだ。どうや

って誤魔化すか、少しでもマシな理由は、どう言えば。……違うな。たぶん、そんな、パニックにはなっていない。

「……どうして」

最初は、零れたという感じだった。すぐに一つ息を吸って、はつきりと言う。

「どうしてオーケーしたの」

なんの話だ。どっから繋がった。俺の返答を待たずに小暮は続ける。

「樋口は俺のことなんか、そもそもゲイじゃないのに、普通に女の子が好きで、女の子と付き合っただけでセックスして結婚して、そういう普通の人のなかに、俺のことなんか気持ち悪いって、そういう普通の、普通の」

普通の人だろ。

初めてまともに目が合った気がする。泳いでばかりいた視線が、今は俺を見ている。俺、俺、だろうか。小暮の言う人はずいぶんと酷い人間に思えた。

「お前、そんなヤツ好きだったの」

いや、でもそうだ、言う通り、普通じゃないか。異性を好いて異性と付き合っただけで異性と、そもそも異性とじゃないと結婚できな

いんだから。それが普通だ。当たり前だ。

「お前が好きになったヤツはそんな——いや、そうだね、そんなヤツだったかもね」

やっぱり、俺じゃんか。手紙の違和感の正体に思い至らなかったのは。クラスメートの言葉に反論する気が起きなかったのは。普通の、当たり前のことなんだ。ただ俺の、圧倒的多数のそれが小暮には当てはまらないというだけで。

「どうしてオーケーしたのか、だっけ。わかんない。断るつもりだったよ、さすがに。よくわかんないけど、気付いたら言っていたんだよ、付き合おうって。とりあえず付き合ってみなよ、言っただけだよ。あれはまあ本心だよ。男にも適用されるとは思っただけだよ。でも考えてもみなよ、両思いじゃなきゃ付き合えないとかハードル高すぎじゃん？ お前は嫌かただけだよ、それとおんなじで、俺はいって思ってるわけ。それだけだよ、たぶん」

何言ってるのか、よくわかんないな。何言いたいのかも、どうしたいのかも。ここで修正しなきゃ終わりにするんだろうってのはわかる。終わらせたくないのかは、わからない。

「俺からも聞いていい」

「……なに」

「なんで告白したの」

今も、告白直後を思い出しても。どう考えたってこんな、無茶なことをする人間には見えない。現にもう、視線は外れてる。

「……言うつもりはなかったんだ、本当は。気持ち悪いって思われるくらいなら黙ってた方がって、ずっと。数年後には、いやそもそも覚えてもらえてないくらいでも、その方がいいって。でも、樋口見てたらさ、頑張らなきゃって。樋口のこと好きなら逃げちゃいけないって、思ってた」

いや、それこそ誰だよ。そんな影響力あたえちゃう人間、どこにいんだよ。自分で聞いといてそんな感想しか出ない。ひたむきにひたすらに努力している人間みたいじゃなか。なんだそれ。誰だそれ。少なくともてきとーにヘラヘラ笑って、放課後のチャイムを待ち続ける人間じゃあないはずだ。いったいコイツには俺がどう見えてるんだ。いや、そもそも、だって。

だって、お前、昨日の俺見てたんだろ。

言わなくたって、バレバレだ。怒ってもいいんだよ、お前。

「言いふらすつもりはないけどさ」

こつち、見てくんねーかな。

「そもそも、ああいうこと思うヤツって言ってもどうしようもな

いつつか、そういう問題だと思って、こういうの。でも、今度また同じようなこと言われたら、うん、ちゃんと言ってやるわ」
知らねーヤツが勝手言うなって。

ああほら、やつと、また、こつち見た。どういふこと、つて顔に書いてある。

「いや、だってさ。お前のこと悪く思われんのヤだもん」

だから、これは俺のワガママ。

「それじゃあさ、ダメ？」

認めてしまえば楽になる。他人に理解などされなくとも、自分が理解できないより余程いい。理屈も理由もぜんぶほつちまえ。必要なのは、たぶん、それだけだ。先があるかなんて、そんなことは関係ない。ああそうだ、忘れないうちに聞いておこう。お前は俺をなんだと思ってるんだと。お前にはなにが見えてんだと。今は、それだけでいいじゃないか。

指先ノスタルジア

鏡上 怜

学園祭の翌日。つまり就活を控えた秋。

今日は大学が休講だから、日帰り旅行に行こう。そう思いながら、今日もいつものように朝食の支度をして、食後は近所をぶらぶら歩いている。予定がない。強いて言うならちよつと風邪をひいたっぽい。そうだ、病院に行こう。大袈裟なくらい意気揚々と歩いていたら近所のおばちゃんから怪訝な顔をされたから少しだけ元気のない歩き方に変える。そして手を振る。

.....

僕の左薬指は、少し動きが鈍い。

そろそろ十年の付き合いになるのに、まだ僕の手になじんでないようだ。もしかしたら、僕の方がなじんでないだけなのかも知れないけど。

『ごめん』

そんな声が、脳裏に響く。僕の指が肉製から鋼鉄とプラスチックのものに変わったという事実に触発されて毎回浮かび上がる記憶。指のことよりも僕の心に深く刻みつけられた思い出。指が

変わった前後にしばらく続いた痛みは感じなくなったつもりでも、この痛み慣れる日は、今のところまだ来ていない。

あれは、僕が六年三組で過ごしていた小学校最後の冬休みが近づく季節のことだった。

当時僕は、クラスメイトの宮崎ゆきに恋をしていた。他のやつから言わせると宮崎はブサイクではないものの大してかわいいわけでもないということ、そう言われてみると確かにもっとかわいいう女子は他にもいたし、他にも、ずば抜けて勉強や運動ができるわけでもなく、特別スター性があるわけでもなく、どこにでもいる、教室にいくつかできる小さなグループの一つで中心になつたりならなかったりしている、普通といえば普通の女子だった。

そして僕も、どこにでもいる、恋する小学生だった。

ある日、僕はどこにでもいる小学生ではなくなった。どこにでもいない小学生のレッテルを貼られることになった。

僕がそれまで十二年と数ヶ月付き合っていた左薬指は、「ぼん」と、いや「だん」と僕の手から離れてしまった。

きっかけはといえば宮崎考案の、と言ってしまおうと先人の存在

を蔑ろにしていまいそうだから一応、彼女ではない昔の誰か原案の、どう考えてもバイオレンス系のマンガから着想を得たらしい「けじめごっこ」という遊びであり、別に僕と誰かの結婚を阻止しようとしたなんていう、そういう妄想系チャンネルを受信するほど僕の脳波は混線していかない。むしろそんな小学生がいたら軽く引く。一部嘘。かなり引く。そんな猟奇趣味は僕にはない。

まだどこにもいる小学生だった当時の僕の日常といえれば放課後に、学校からそう離れていない所にある、看板が撤去されて久しい、店先に植わった柳の木が目印になっている元小型スーパーマーケットの建物に集まることだった。

僕らが小学四年生の頃、近所に超大型ショッピングモールができたことで客足が激減して、最後まで通いつめていた店主の友人だというおじいさんが亡くなってとうとう閉店したその建物は、外見のあまりのボロさに人も寄り付かないし、特に土地に困っていないということ、ガラスの割れた自動ドアの隙間を塞ぐように立ち入り禁止のテープが張られるくらいの措置しかとられなかった。

そしてその都市開発は地域を活発にすると同時に、僕らの遊び場を減らしてしまった。

公園と呼べるような公園が近くなかった僕らにとって遊び場といえば、大型ショッピングモールができるのと同時に開通して以降今もその周辺のメインストリートとなっている広い道路だった。小学二年生くらいの時にはもうできていたけど、設置された信号はいつまでも真っ暗で、道路に入る位置には車の進入を禁止する赤と白の柵が立てられていた。僕はそのだっ広い遊び場がとても好きで、自転車の練習も、キャッチボールも、クレール射撃もどきも、かくれんぼ以外の遊びならきつと何でもやっていった。

そんな遊び場がショッピングモールの登場によってなくなり、駅の方まで行かないとなかったゲーセンとかおもちゃ屋がぐっと近所になったことを喜ぶ一方で、僕らだけの遊び場というものがなくなってしまったことに少し不満があった。で、一年間の試行錯誤の末、小学五年の冬、だっ広いだけだった道路が車を受け入れ始めてからしばらくして閉店した、近所の小型スーパーを新しい遊び場候補として選んだのだった。

そのスーパー跡の入り口に張られたテープは、一年分の弛みのおかげで全然その役割を果たしていなかった。だから僕も、来る人がいなくなってもまだ青々としている柳の木に心の中で申し訳程度に言い訳をして、薄暗い店内に向かって、テープをくぐった。

ういーっす大将、って言いながら居酒屋の暖簾をくぐる仕草をまねしてみた。誰もいないと思っていた中には、もうその頃には僕の意中の人になっていた宮崎がいた。

それがきっかけで、僕の新しい遊び場は決まった。

中に入った店の中では空っぽの商品棚が余所者を嫌うように整列していて、カウンターからレジ本体は無くなっていただけ、買った物を置く作荷台は普通に残っているの、なるべく入り口から遠い台を僕と宮崎、あと僕の友達である佐藤と野崎、それと宮崎の友達の女子二人で囲むようにして集まった。本当なら、初めて会ったときみたいに宮崎と二人きりでここに集まりたい気持ちもあるんだけど、それで思春期特有の衝動とやらが僕にどんなことを囁くやらわかったもんじゃやないから（というわけではきつとなく、二人きりになるのが恥ずかしかったのだろ）、宮崎が友達を呼んだのを口実に、僕も何とか頼み込んで友達に来てもらった。春先に初めて連れて来たときは暗さと狭さを敬遠していた二人も、梅雨入り前にはすっかりなじんだ。そして僕ら六人は、毎日その場所が集まっていた。今思えば、あの閉塞感が僕らを魅了していたのかも知れない。

といつても別に疚しいことはしない。そもそも当時の僕らが疚しいことなんて知るわけもなく、仮に知っていてもそれは液晶越しの世界の出来事だったりたまたま警察署の人が来て講義する話の中の出来事だったりして、全く現実味もないのですぐ忘れ去られてしまう。だから当時の僕らには、少なくとも僕には無縁の世界の話だった。

だからそんな僕らがすることといえば本当に、外でもできるような遊びを店内でするだけなんだけど、その前に何かしらの噂話をするのが僕らの間で流行っていた。その日も、クラスの学級委員がこの前来た教育実習生に惚れるとか、二組の誰と誰はもう、同級生に先んじて大人の階段を駆け上がっているから一組の誰は失恋決定でかわいそうとか、疚しいままでは行かないけど学校で堂々と話すのには抵抗のあるゴシップで盛り上がっていた。特に今日は、学校のマドンナと称される一組の女子が、中学生の男友達数人と同時にやばいことをしてる映像がネットで流れているなんていう、もはや都市伝説レベルのフィクション入り混じりまくりで出所不明な話で盛り上がり、

「ねえ、これ使って遊ばない？」
なんていう、どこかにあつたらしいナイフを手に持った宮崎の

提案は、興奮冷めやらぬ僕らの誰にも反対されることなく、むしろ誰からともなく「それどんなの!？」とか言ってますます盛り上がった。そのナイフはごく普通の果物ナイフで、だけどころかなり綺麗に磨かれていたのだろう、建物の隙間から入り込む夕陽を浴びて放っていた鮮やかな朱色の光が、目に焼き付いている。

そこまで細かいルールは考えてなかったらしい宮崎は、まだ赤いままの顔を上に向けてしばらく考えた後、その簡単なルールを話し始めた。

まずは指を詰める側と詰められる側に分かれて、詰める側はナイフを相手の指のどれかに向かって振り下ろし、詰められる側はただ耐えるのみという、シンプルを通り越して一見適当な遊びだ。勝敗はいくつかの要素で決まっていて、まず詰める側のナイフと詰められる側の指が五センチ以上離れていたら無条件で詰める側の負け。そうでなければ詰められる側が悲鳴をあげたら詰められる側の負け。詰める側としてはいかに声を出させるか、詰められる側としてはいかに声を抑えるかが重要な、今思うとダレるわりに無駄に失敗時のリスクが高い遊びだった。それを遊びと思えるくらい、僕らは幼かった。

負けたときの罰ゲームは特に設けず、勝敗が決定した後その場

で勝者が決めていいという、考えようによっては危険極まりないルールも追加された。確か女子の誰かが色々気を回して、その罰ゲームは衆人環視の中でできることに限るとかいいうルールが最後に付け足されて、僕は内心で、佐藤は目に見えて大げさに悔しがった。野崎は「そんなことより、早くやろうぜ!」しか言っていなかった。

そんな盛り上がりの中始まったこの遊びは、その日以降二度と遊ばれなくなった。当たり前だ、僕らはこの日を以て一切集まらなくなってしまったのだから。

宮崎考案の遊びらしからぬ遊戯を最初に試したのは、宮崎と僕だった。僕の左薬指を押さえた宮崎の手は、少し震えていた。

ナイフといえば、という宮崎の友人Aの提案を受けて、精一杯柄の悪い演技をする宮崎。僕も対抗して、口ではなんじゃわれー、とか言いつつも意識は左薬指に向かう。もちろん毎日見ているその姿ではなく、普段感じない圧力に。柔らか過ぎるぞこらー。声かわいすぎだろあほー。耳幸せすぎるぞばけー。この心拍数どうしてくれるんじゃわれー。

言いだしっぺならではの責任感で引き受けたんだろうけど、やっぱり人の指にナイフ突き立てるとか、わりと勇気がある。むしろ

ろそんなことができる勇氣はいらない気がするけど、どうも決心がつかなかったらしい。僕の左薬指は結構長い時間宮崎の指に触れていて、僕の口は同じ言葉を吐き続けていた。柄の悪い言葉ボキヤブラリーはとつくに底を突いていた。僕よりは語彙力のある宮崎も、とうとうわれーわれーしか言えなくなってきたいて、そんなだから周りもダレてきたんだと思う。

「ゆき、いつまでやってんの？ もしかして佐波さわとできてんの？」

野次のついでに投げ込まれた僕の名字に対して「ち、違うし！」と力いっぱい否定しながら宮崎が慌ててナイフを振り下ろした。

「うわっ!!」

触れていた手の柔らかさに気を抜いていた僕は、状況の急変に驚いて思わず押さえられていた左手を、何も考えず動かしていた。

宮崎の手の余熱が冬の空気にほんの少し温かかったけど、その少し後、全然関係ない箇所が痛いくらいに熱くなって、そのくせ先端部を感じていた心地よい温もりはあつという間に、すっぱり僕から離れてしまった。そしてその時に何があったのか、その瞬間には見当も付かなかった。指の付け根に感じた激しい熱さも一瞬で消えて、少し寒さを感じた。でもそれより気になったのは、僕は宮崎とのゲームで悲鳴をあげてしまったということだった。

つまり僕はそのとき負けが決まったわけで、つまり宮崎が望む行為を強いられるわけで、きつと僕はあらぬ期待をしていた。考えてみてもほしい、自分たちの他に誰も立ち入らない廃墟で遊んで、直前に刺激的な話題が出て、そして罰ゲームときたもんだ。さすがに今はそうならないだろうが、思春期真っ盛りの僕は、これらの要素を勝手に曲解してわくわくしていた。

宮崎を振り向いたときに気まずそうな顔をしていた。それに何を期待したのか、「これって宮崎の勝ちだよな？（＝決着ついたんだからさつさと帰れお前ら）」と周りに言おうとして、視界の端に入った自分の左手を二度見した。

あつという前に、さつき野次を飛ばした女子の悲鳴が周りの空気を震わせて埃を巻き上げながら僕の鼓膜と指にできた傷口をびりびり刺激する。傷口は思った以上に大きくて、想像できないくらい痛かった。

目に入った左薬指が、その途中からすっぱり無くなっていた。

指の断面を痛みつけるその悲鳴がスイッチとなったようで、残った三人もわらわら動き始めた。宮崎だけは、その後も固まった

まま動かなかった。気まずそうな顔の理由がわかった。

一方その前から動いていた僕はというと、とりあえず指の、指があつた古巣の断面を塞ぎたくて、どこかへ飛んでいったらしい薬指を捜していたのだけれど、パニックに陥った友人たちが邪魔で思うように動けなかったし、意外に宮崎の勢いが強かつたのに近いには落ちてなくて、なかなか見つけることができなかった。

人呼んでくる、と言って外に走って行った野崎のスニーカーの下から、ちようど僕の指くらいの大さきのミンチが現れた。できたてほやほやの、まだ温かそうな指ミンチだった。

おろおろする間もなく、おろおろ吐いた。

喉と鼻に走るつんとしたようなすつとしたような息苦しい痛みは、今更自己主張を始めた指の痛みにあつさり打ち消されて、両膝から力が抜けて。

ぴちや、という湿った音に遅れること一、二秒して温かく湿った感触が気に入っていたトレーナーにじわじわ滲みってくるのを感じて、その日の給食で散々お代わりしたフルーツポンチの臭いが鼻をもぎとろうと試みて。

僕の意識は暗転した。

それ以降、僕自身は以前とほとんど変わっていないというのに、次の日からの世界は僕らの意思を無視して大きく変わっていた。

僕自身についての唯一の変化として、左手が薬指一本分軽くなつた。さすがにミンチになつた肉片をくっ付けることはできなかった。自分の指がなくなつたというシチュエーションがいまいち理解できなくて、不便になりそうだな、と思うくらいしかそのときの僕にはなかつた。

病院に行つたとき、その経緯を誰かから聞いたらしい父親に泣きながら平手を食らつて、母親からも頬を殴打された。慣れないことをした父の平手は頬ではなく左耳に当たり、聴力的なことが心配になつたけど、それよりも父親の泣き顔を見たのが初めてで、それだけのことが起こつたのかな、とまだ残る鈍い痛み以外実感できる要素もないまま、自分の現状についてその場では納得した。宮崎が両親に連れられて謝りに来た。それまでに何があつたのかわからないけど、泣いていた。それを見るのが辛かつたことが印象的で、言葉は耳に入らなかつた。

しかし、次の日から僕の周りに起こつた変化については、どうしても納得できるものではなく、納得したくもなかつた。

少し遅れて学校に行くと、みんなが僕ではなく包帯ぐるぐる巻

きの左薬指跡を見た。そのくせ定期的に目を逸らして、必死になつて「人の怪我を気にしてじろじろ見る不躰なやつじゃない」アピールを繰り返していた。実際問題僕自身がこの跡を気にしているのも、そんなアピールは正直の外れというか、特に話もないのに僕の左手見たさに近付いてくる時点で失敗しているというか、はつきり言つてその記憶は思い出すだけ不愉快だった。

そしてまる一日過ごして見つけたもう一つの変化。

僕の指がミンチになったときに傍にいたクラスメイトが、宮崎も含めて誰も話しかけてこなくなつた。僕が話しかけなければ反応を返してくれないし、話しかけてもすぐに会話が止まつてどこかに行つてしまう。女子二人の方は僕としても宮崎のオプシヨンくらいにしか思つてなかつたからいいとしても、野崎や佐藤がそうなつてしまつたのは少し寂しかった。僕はあまり変わった気はないのに、周りがいきなり余所余所しくなつてしまつた。何をしたわけでもないのに、僕はクラスで孤立した。

そしてこれは気付くのに一日も必要なかつた変化。僕に対する異常な関心を除けば通常運営のクラスの中で、宮崎だけがそこから閉め出されていた。僕よりもあからさまな孤立をしていた。僕は毎時間毎分宮崎を見ていた。だから、その違いにわりとすぐ気付

いてしまつた。

宮崎を見ているところに話しかけてきたクラスメイトA。なかなか馴れ馴れしい。冬になって今更新しい友達作りでもないだろうに。

「な、なあ佐波。さっきの体育さあ、」

「あのさ、何で宮崎あんななの？」

それはさつきから何回も振られた話だ。僕は言葉を遮り、左手を机の中にしまう。案の定彼の目的は僕の左薬指を見ることだつたらしく、小さく「あつ」と呟いてから、「何でそんなこと聞くわけ？」と露骨につまらなそうな顔をしながら聞き返してきた。正直なやつだった。

「いやだって、いつもと違くない？」

確かに宮崎はそうそう目立つタイプじゃない。特別抜きん出たところがないし、下手をすればそこらへんに埋もれそうなやつだった。それにしても一応友達も多かつたから、ずっと独りきりで休み時間を過ごすなんて、ありえない光景だった。そのときの宮崎は、透明人間のような感じだ。

「いつもって何だよ、知らねえよ。まさか佐波ってさ」

「何でか知ってんのか、知らないのか、どっちだよ」

初対面の相手の言葉は最後まで聞く、なんて決まりはないから、遠慮なく遮る。当時急に出るようになって気恥ずかしさを覚えていた低い声で聞いてみた。こうかはばつぐんだった！ 言いにくそうにそのクラスメイトは言った。

「だ、だって宮崎だろ？ 佐波の……」

ああ、そういうことか。

納得した自分と、納得させたクラスメイトAを殴りたくなかった。

決して広くない学区内である、ひっそりと遊んでいたスーパ跡での一件は多少の脚色を経て早く広く知れ渡っていたようだ。

本人不在のうちに僕と宮崎は勝手に被害者と加害者という、事実を無視したわかりやすい区分に分けられて、被害者であるところの僕は腫れ物に、加害者であるところの宮崎は除け者にされてしまったらしい。そうやって、噂のクラスとなってしまうのだらうこの六年三組は、辛うじて秩序らしきものを守っていた。

宮崎の方に視線が流れて、そのときに宮崎と目が合って慌てて逸らされた。そのことに少しショックを受けながら僕も視線を逸らし、それからしばらくしてもう一回チラ見してみたけど、もう視線が合うことはなかった。今更になって泣きたくなっただけど、涙は出そうになかった。

そんな僕の代わりにとでもいうつもりなのか、昼頃から空が号泣した。おせっかいにも程があり、ちっとも嬉しくなかった。

空の機嫌を窺うのが得意な气象台にテレビ越しで午後から天気荒れそうなのを無差別に教えられていたうちの一人である僕は傘を持って来ていた。時間に余裕がなかったのかそれともテレビを見ない派なのかはたまたま気象予報を信じないクチなのか、持ってきて来なかったやつはわーわーと、それはそれで楽しそうに騒ぎながら走って帰るか、空を見上げたり下駄箱を振り返ったりしてその場を凌ぐ(雨に濡れて帰る覚悟を固める)かに分かれていた。

まあ、雨宿り組もそれはそれで、何人かでまとまって話したりと楽しそうにしているのが常で、だから小学生僕もいそいそと帰るのを常としていたわけだけど、そのときは事情が違った。

久々の豪雨で足止めを食らうという非日常に酔った勢いで、少なくとも当時は毎年夏休みに市役所で催されていたつまらない市民祭りがかわいそうになるくらいの盛り上がりを見せる昇降口を出たところにある昇降口。その傘立てを見つめている宮崎の姿を見て僕は立ち止まった。

傘の入っていない傘立てを宮崎につられて覗き込んだ僕は、そ

こに骨があるのに気付いた。細い金属の骨は不自然なくらい滅茶苦茶に折れ曲がり、何かしらの柄がついていたらしい皮膚はびりびりに裂かれていた。そんな、恐らくは宮崎のものだったのだろう傘の残骸が、スーパ―の床に転がって骨も肉もわからないミンチの姿と重なって胃と頭が一瞬暴れる。とりあえずそれには耐えて宮崎に近付いた。しかし、そのときの僕は自分の気分を偽りながら歩けるほど器用ではなかった。すっかり変わってしまった世界で異常を自分から作り出せるほどの勇気も僕は持ち合わせていなかった。

だから結果として、ごく自然に話しかけたかっただけの僕は、更にこれが宮崎の名前を面と向かって呼ぶ初めての機会だったなんて余計なことまで考えてしまい、せつかく呼んだ名前は

「ミヤザキ」

思い切り片言っぽくなってしまった。どこの低品質音声ナビなんだ僕は。

だけど、どうやら宮崎には僕の意図が伝わったらしく、振り返ってくれた。そして僕を見つけて、気まずそうな表情とともにまた目を逸らそうとした。だけど、僕はそれを許さなかった。もちろん、そんな強い意識を持っていたわけではない。だけど、僕は

実際すぐ近くまで言って改めて彼女の名前を呼んでいた。今度は日本語っぽく。

もう一度振り返った宮崎は、僕の顔を窺うような目つきだった。

僕自身は責めるような顔なんてしていなかったはずだけど、宮崎は僕の姿を見ただけですっかり固まって、一回り縮んでしまったように見えた。僕はそんなことを意に介さず、親切心丸出しで声をかけていた。

「宮崎さ、傘ないのか？」

そして親切な顔をして、僕は卑怯だった。

傘がないなんて見ればわかることだったので敢えて聞くところがより一層。

「そっちの方角に用事あるから、送るよ」

そう言えば僕に負い目のある宮崎が断れるわけがないこともわかっていただろうか。きっとわかってなかった。それくらいに僕は、宮崎と二人で話すというシチュエーションに浮かれきっていた。ただ何も考えず、宮崎が隣にいるということに心拍数を跳ね上げて、傘に当たる雨音も少しづつ濡れていく右肩の冷たさも雨とは関係のないランドセルの重さも、全部がその日の下校時間

を盛り立てる小道具くらいにしか思っていなかったのだろう。

その下校中、僕の脳内は桃色有頂天な状態だった。それは確かに覚えている。確かに僕は、宮崎との下校を楽しんでいた。

だけど、それでも浮かれきったままではいらなかった。そのままではなかった僕の目に、宮崎の白魚のような指が十本全部揃っている様子が目に入ったからだ。それを見てしまったがために僕の心は激しくざわついた。宮崎との下校という事実には浮かれている一方で、宮崎の真つ新で綺麗な指をふざけたフリして散々舐めしゃぶってとろとろにしてしまった後でそのまま噛み千切ってしまうという欲望が僕の心に芽生えた。そのときあと少し理性が欠けていたら、行動を起こしていたかも知れない。

教室のクラスメイトたちはその日も平静に異常事態仕様だった。やはり僕ではなく僕の左手を見る為に歩み寄ってくるやつらに嫌気が差す日常サイクルは続いた。その中には、前日は気まずそうにして見に来たりしなかった佐藤や野崎の姿もあった。宮崎の友人二人も見えていたと思う。何だか、それが人間か、なんてわけのわからないことを考えたりしたのを覚えている。

一時間目の体育は、大事をとって見学ということになっていた。そうするように僕に言った両親はしばらくの間、と言っていたけ

ど、結局小学時代の僕が体育に参加することはなかった。

その日、宮崎はとも目立っていた。

二学期終わり間近に行われるマラソン大会に向けての練習が終わった後、余った時間で僕以外の二十数人でドッジボールが始まった。だけど、宮崎のチームにいたやつはみんな外野に行ってしまった。いつもなら易々取れるような球に当たって、開始直後数十秒で、十数人いたはずのチームの内野は宮崎一人だけになってしまった。宮崎びいきで宮崎チームを応援していた僕としてはかなり焦る展開になっていた。すぐに終わってしまうのではないかと思っていた。

しかし、長かった。宮崎の内野時間はとても長かった。

途中で外野が戻れば問題なかったのだが、全然戻らなかった。

宮崎陣営の外野たちは執拗なまでに宮崎にパスを回した。宮崎は大して投げられるタイプじゃなかったのに。しかも本当にパスなのかと疑わしいスピードで。敵側も宮崎の足元でワンバウンドさせて脛に当てるという芸当をやっていた。そのときは「宮崎がんばれ」なんて暢気なことは言えなかった。脛や膝にバウンドボールが当たる度に痛そうな顔が目に入るのに、止めに入ろうと思ったのに、手も足も喉も動かなかった。その当時の僕にとっ

て、空気は読み物だった。中途半端なエアリーテラシーが憎らしかった。

結局、ドッジボールはチャイムがなる寸前、クラス全体でのパス回し（十宮崎への狙い撃ち）に終止符を打つ強打が宮崎の腕に叩きつけられたことで終わった。晴れ晴れした顔で校舎に戻っていくみんなの姿をじっと見ている宮崎の姿を見つめることしかできなかつた。

結局僕が愛と勇気の食品ヒーローの黄色いブーツに踏み潰されても気付かれないほどミクロな勇気を振り絞れたのは、宮崎が少し俯いてクラスメイトたちの後に続いて歩き始めた後だった。

「宮崎っ！」

ミクロな勇気を手遅れな段階になってからじゃないと振るえなかつた僕を見たのは、すっかり沈みきつた顔をした宮崎で、僕の心に重く響いた。

「なに？ ……佐波」

それを誤魔化す為か、もう新人俳優の演技に難癖つけるのをやめたくなるくらい下手な笑顔を浮かべて、必死に今まで通りの自分を演出した宮崎。それに応える僕の表情筋もぎざぎざと軋んでいた。

「保健室に行かないか」

公園のトイレに誘うみたいな言い方になった感は今でも否めないけど、それについての論議は大事なことではないから割愛する。僕の言葉を聞いたときの宮崎は、きよとんとした顔を作っていた。宮崎は当時、演技が物凄く下手だった。薄く腫れた腕や脛がせつかくのきよとんを台無しにしているのにはきつと気付いていなかったのだろう。

曇り空の下で心なしか灰色がかって見える校庭で、宮崎の姿は風に吹かれたらすぐに飛び散ってしまいそうほど頼りなくて薄かつた。あのスーパードレスで六人の中心付近に見えていた宮崎の姿は、見る影もなかつた。

しばらくきよとん顔をキープしたままで、宮崎は空を見上げたり周りを見回していたりして、何も答えようとしなかつた。

理由は忘れてしまったけど、屋根を補強する為に組まれた鉄の足場が目立つ体育館の脇に造られた池で飼育されている鯉が好物でも見つけたのかピチピチ喚き、校庭を吹き抜ける風が僕の鳥肌をスタンディングオベーションさせて、次の授業に向けて別学年が出てきて、それでようやく僕らと何かを見下ろしている時計に目をやって、宮崎はそれからうー、とかむー、とか唸り始めた。

僕はというと、うはあそのボイスばねえ（宮崎限定で）とか考えていた。今思うと、何やってんだ僕。我ながらおかしい。クレイジーだ。

もう少し聞いていたかったばねえボイスこと唸り声が一分弱で打ち止めとなり、それとほぼ同じオクターブで、同じ声帯から、同じ音質で答えは返ってきた。それは、はっきり言ってしまう僕の誘いの拒絶であり、「傷だらけのヒロインっていうのいいものだよ？」という意味不明に過ぎる返答から、宮崎が実は相当自信家だったのだということを思い知らされた。

「ふうん……」

さすがに宮崎に心底惚れ込んでいた僕でも、その言葉には少しだけ引いた。だが僕もさるもの、「確かにヒロインだ」というこれまた意味不明な言葉を吐いて宮崎に引かれてしまった。人に引かれる寂しさを味わったのはこれが初めてのことだった。意外に自分勝手な性格だったようだ。宮崎ってこんなだったんだなあ、としみじみ思った。

この頃に、そして宮崎に限った話ではないのだけど、今でも僕は自分が親しいと思っている人間についてあまり多くを知らずに生きている。

誰にでも裏表はある。裏表と言わないまでも、ある程度の顔はみんな持っている。家族の前で使う一人息子の顔、授業中に被る借りたネコのような児童の顔、それと下校途中にあったあの遊び場で使っていた六人だけで通じる顔、今現在使っているケセラセラな顔。互いに矛盾してそうに見えるものだって、きっとそれはサイコロの面みたいに全部が本当だ。

そんな風に僕や同級生たち、それに両親や教師陣、通行人たち、ヒーローショーのヒーローたちが持っている代物を、宮崎が持っていないわけがなかったのだ。きっといっぱい持っていたのだろう。

朝、授業中、休み時間、放課後、学習塾、そしてきっと、たぶん、もつと色々。僕はその中でも、授業中と昼休みと放課後の顔しか知らなかった。あとの宮崎については全然知らずにいた。知らずじまいだった。

たとえば、学校の校庭で急に自信満々な面を覗かせたように、もつと色々な宮崎を見る機会があったのかも知れない。今となつては、想像するしかないけれど。

ともあれ、その校庭で普段の宮崎とはしないような話が出来た

ことにすっかり浮かれてしまった僕は、その日の午後三時半、妙な期待をして、僕が宮崎の感触と引き換えに指一本を失ったスパー跡に走って行ったのだ。

三時半も回ると空は完全に夕方の顔になっていて、風も一段と冷たくて、一部分は文字通り骨身に凍みた。その中を僕は、何を作っているのか全然わからない（この一年後に廃墟と化した）古い工場を通り抜けて、その場所に向かった。

二日ぶりに来た、入り口脇の自動販売機が撤去されて久しい秘密の遊び場だった場所は、もうネコ一匹がやつと通れるくらいの隙間を残して、窓もドアもびつちり塞がれていた。

左手が痛い気がして、ポケットの中にしまった。
もしかしたら、と。

もしかしたらここに来たら六人揃って、何事もなかったかのようには薄暗くて埃臭くて居心地のいい時間がまだ続けられるんじゃないかと、そうじゃないとしてもとりあえず揃ったときの皮算用くらいはできるんじゃないかと期待していた。

だけど、僕の体で唯一宮崎に触れていたあの指がミンチになって元に戻らなくなったように、一年と少し続いていたはずの時間は、恐らくは僕のせいですばつと切れたきり戻らなくなってしま

ったのだ。ここで遊んでいたやつらはどこに行っただろう。もう別の場所を見つけたんだろうか。それとも校庭で遊ぶ組に交ざって何かしているのだろうか。一瞬校庭に足が向かいかけた。でも心が渋っているのを察して自重した。別にしなくてもよかったのだろうけど、行っても気まずくなるだけだということは何となくわかっていた。やっぱりその時点で僕の大事にしていた「今まで」は終わっていたのだろう。

遠くで、恐らく中学生だろうか、悩み事なんて何もないような風の笑い声が聞こえた。その三ヶ月後には僕もなった中学生。彼らの前にはまた違う世界が広がっていて、きつと僕の悩んでいるようなことはあつという間に過ぎ去ってしまうような所なのだろうと、当時の僕は根拠もなく信じていた。実際そうだったかはともかく、小学生の僕にとって中学校というのは全くの新世界だった。ちなみに僕の学年はほとんどが近所の市立中学校に通い、一部の受験が必要なところに入ったやつらとは疎遠になったやつが多かったようだ。ようだ、といつても同じ私立中学校に行ったやつも含めて学年のほとんどと疎遠になった僕が言うことではあるまい。それを薄々察していたのだろう、彼らにとって生まれて初めてになる受験について、大体が話題にしなかった。

みんなと違う何か、というの少なからず怖いことだった。この時の僕にとって、口ではそんなの平気だと言いつつも、できれば居心地のいい空気にくるまってもらえるかどうか死活問題だった。

「ちよっと前まではくるまっていられたのにな……」

気取った独り言は妙に空しくて、冷たい風に揺れてせせら笑う柳の木に八つ当たりしたらそれを見ていた近所のおばさんにごっぴどく叱られた。怒られているときにポケットに手を入れていることについても咎められてとても困った。後ろで手を組むことも言及しかけてはっと気付いたときの顔を忘れたことはない。

「……佐波」

気まずそうな顔で去るおばさんを見送った後、いよいよ帰ろうとしていた僕は、驚くよりも、逃げるよりも、振り向くよりも先に、左手をパーカーのポケットにしまいこんでいた。それから振り向いた先には、少し傷ついたような顔をした宮崎がいた。夕焼け色になったアスファルトに映った人頭身以上ありそうな長い影は、六人で遊んでいた店内よりもずっと暗く見えた。今更出せなくなった左手はポケットの中で汗まみれになって、乾ききった口はとても何か気の利いたことを言えるわけもなくて、「……み、宮

崎」と空ろな声を出すことしかできなかった。

それからしばらく、二人して黙っていることしかできなくて、無料で風の音と身を切る寒さを堪能した後、思わず僕の口から漏れた「寒っ」という呟きをきっかけにしてようやく会話らしい会話が始まった。

「寒いね」

「……寒いな」

「ここ、入れなくなっちゃったね」

「そうだな」

「また新しいところ探さない」と

「この近くに遊べるとこあんのかな」

「うちのちよっと先にちっちゃい公園があるよ」

「ふうん……」

結局その公園に僕は行かなかった。学校から帰るにあたってどの地区に帰るかなんて関係なく集まれるあの遊び場がなくなった時点で、僕と宮崎の接点はほとんどなくなっていたのだ。宮崎の住んでいた家は、一回家まで送ったときに知ったけど、かなり学校から離れていた。自分たちを取り巻く人間関係ももう終わっていたし、認めたくなかったはずなのに僕はあっさり自分たちが

もう一緒に集まって遊ぶことはないだろうことを認めてしまっていた。だけど態度の上だけでは否定してたくて。

「そこってやっぱ遊具とかないのかな」

聞かなくても困らないようなことしか聞けなかった。宮崎も案の定「そ、そうだね」と目を瞬きながら言うしかなかったみたいだった。しかし宮崎はそんな僕のヘタレ丸出しの発言を、何かの冗談かカミングアウトの一つとでも思ったようだ（そうかは定かではない）。少しおかしそうな顔をした。

「佐波ってそういうの使うんだ、何か似合わないね」

「違うよ使わない。ちよつと聞いただけなんだからそんなにっこむなよ」

「慌てて言うって、やっぱやりたいんだ」

「ち、違えし」

僕はそんなの小学三年生で卒業していた。

だけど、そうやって軽口を叩き合うのも悪くなかった。宮崎が結構いい笑顔をしていたからかも知れない。きつとこんな気持ちになるのは宮崎限定だった。そういうときに寒さが理性の代わりに僕の脳内をクリアしてしまったのはタイミングが悪かったのかも知れない。もわもわ桃色な脳内から引き戻されてみれば、僕ら

の目の前にはもう入れない遊び場跡があつて、それは僕らが笑っていたられた日々の墓場そのもので。

「……つ、佐波、その……、ごめんね。ごめん……、じゃ、もう帰らなきゃだから」

急に宮崎が驚いた顔をした。何かとわからずにいる僕の前から去って行った宮崎の顔に、それまでの何でもありにできそうな笑顔はもう見る影もなかった。気付かないうちに何かしていたのだろうかと思つた僕は、幼稚園のとき、ませた初恋相手に言われた『佐波ってデリカシーないよね』という言葉を思い出していた。

そしてその後には吹いた一際強い風が僕に自分の失敗を突き付けた。頬がいやに冷たくて、触つてみると濡れていた。

「……ははは」

笑うしかなかった。どうやら僕は体中、まさかの涙腺に至るまでデリカシーに欠けていたのだ。空気を一切読めない僕の涙腺はその分僕自身にひどく正直で、だから止めようとしても全然止まってくれず、涙と一緒に心のもやもや以外のものが流れ落ちた。

運よく人が通る前に理性のブレーキが利いて、何とか僕は家路についたのだ。あの日まで僕がどこに遊びに行つていてもトランプルに巻き込まれなければならないというスタンスだった家族は、

もう僕が遅く帰るといふ事態に対して、過敏なくらいの心配性になつていた。左葉指跡の包帯が自業自得だと訴えてきたからポケット禁固刑。乱暴に突っ込みすぎてびりつとした痛みが走る。受信拒否したくてもそうする術もなかったので、黙って痛みに耐えて帰った。

その次の日以降、僕はそのスーパ跡に一人で来ていた。でもそれにも疲れて——以前に戻れるという期待を失つて——からは毎日まっすぐ家に帰っていた。その頃には学校でも本当に腫れ物になつてしまったようで、それか僕が左手ばかり見てくるクラスメイトにドン引きしていたことがバレてしまったのか、もう僕に構おうとするやつはいなくなつていた。逆ギレも甚だしいとは思うけど、当時の僕はそれに対して何も思わなかった。思う余裕もなかったのだらう。ある日話しかけてきたやつが、スーパー前でデリカシーなく泣いている僕を見かけていたらしく、「宮崎にふられたんだ」と僕本人に言うだけならまだしも囁し立てたので思い切りぶん殴った。手が痛かった。関節部分の皮が少しだけ剥けていた。僕がふられたことを気にしたとも思つたらしく、「わかつた、わかつたよ、付き合つてることにとくから」と意味のわからない懇願をされた。僕がふられることなんかはわかりきつてい

たから、そんなこと望んじやいなかった。だから、もう一発殴つて黙らせた。

その日以来、クラスの人気者を殴つた僕はクラス内で後ろ指を指される身になつてしまった。三ヶ月どころか、冬休みまでの数日が、ひどく長かった。

「……さーん！」

診察室から聞こえた医師の声で、僕の隣に座つていたお兄さんが立ち上がった。まだまだ僕の番は来なさそうだ。彼が待合室のラックに戻した週刊誌を手に取り、書いてある記事を流し読みする。正直、記事の内容は僕の興味の埒外なので入つてこない。

だから早々に記事は切上げて、連載されているらしい短編を読み始めたときのことだった。

「佐波くん？」

不意に名前を呼ばれて、思わず過剰に周囲を見回してしまう。二十年ちよつとの人生ですっかり身に付いてしまった挙動不審が泣けてくる僕の前に颯爽と(?)現れたのは、綺麗な身なりをした、いかにも好青年という感じの、つまり僕が一番苦手とするタイプの男だった。こんな知り合いいたか? ……………。

「し、白河？」

小学校時代のことを思い出していたせいか、その名前はすぐに出てきた。というか、むしろ白河の名前は、目を逸らしたくても逸らせなくらいに僕の小学校メモリーに焼きつけられた名前だったりする。

「ああ、やっぱりそうだ。久しぶりだね佐波くん。まさかこんな所で会えるなんて思ってたよ」

あの頃、僕らの間に接点らしい接点なんてなかったはずなのによく覚えてるな——いや、こいつなら同じ学年のやつ顔と名前くらいはばっちり覚えてるのかも知れないな。こいつはきつと、昔からそういうやつだった。

白河 悠。菓^{はるか}の処方までの時間潰しだったんだ、と言いながら買い物袋片手に同郷の人間との再会を純粹に喜べているらしいこいつは僕にとって、小学校時代ほぼ全く接点がなかったにも関わらず、忘れてしまいたくても忘れることのできないやつだった。そしてついでに、白河との再会なんて喜べるわけがない。

僕が宮崎に恋していたように、宮崎も恋をしていた。その相手

が僕だったら嬉しかったけど、残念ながらそんな事実は存在しなくて、現実には宮崎が好きだったのは僕ではなく、隣のクラスに所属していた白河だった。白河は六年二組だけに留まらず、学年の中心に立つようなやつだった。普段の遊びにしたってクラスの中心だったし、学年で何かやるときの司会進行も大体は白河だった。はつきり言つて、何をさせてもかっこいいやつだった。彼が五年生のときに六年生を送る会で見せたパフォーマンスには、僕も手が痛くなるくらい拍手をしたものだった。何をさせても様になる人物を、僕は彼以外に知らない。

五年の冬休み明け、まだ僕や宮崎がああ遊び場に友達を誘うなんて思いついてなかった頃、その頃に僕は宮崎のことが好きになり、宮崎はもう既に白河のことが好きになっていた。

それから一年、すっかり変わってしまった僕らを見捨て、また同じ季節がやってきた。

年が明けたところで僕の指は九本のままで、宮崎は相変わらず教室で独りきりで、だからカレンダーをめくる作業は僕にとって区切りでも何でもなくて、前の年の冬が続くだけだった。野崎や佐藤も相変わらず余所余所しかった。どうやら去年末にクラスの無神経な人気者を殴りつけたことも僕がクラス内から浮いている

原因で、二人とも空気を読んでいたらしい。僕としては空気より自分を優先してほしいと言える立場でもなかったし、この頃には二人に対して期待も何もなくなっていたから、特に抵抗もなくそれを受け入れることができた。ただ、どうしても用事があって話しかけたときには、空気を読み過ぎていることに対する罪悪感からか、それ以前よりは長い会話も可能になっていた。少しずつ、否が応にも、僕だけは以前の日常に引き戻されつつあった。

しかしそれに対して、宮崎の状況は全く好転しなかった。被害者と加害者という外側から勝手に付けられた括りは内側にいる僕らの態度で解消されることはなかった。宮崎を責めていた連中は、宮崎に何をしてほしいかだったんだろう。宮崎がどうなれば満足したのだろう。それを解き明かすのは教育評論家やらその辺の方々の推測やら法則適用やらに任せておくことにする。僕には、いくら考えても分からなかった。結局何もできないまま、ただ光陰が弓から放たれるのを黙って見送るだけだった。どうしても、言えなかった。何で宮崎だけが責められなきゃいけないんだ、と。宮崎を責めるなら僕ら全員を責めろ、と。僕も、あのとき一緒にいた四人も、同じように責めろ、と。彼らは何の躊躇もなくそうするだろうとわかっていたからかも知れない。

無視が主だった宮崎いじめがエスカレートしていたのを知ったのは一月下旬くらいだった。校舎裏に持ち物が捨てられているのを拾いに行く宮崎が目に入った。散々躊躇して、何故か声をかけられなくて、家路も半分来たところで僕が引き返したときには、宮崎はもう帰っていた。寂しげな赤いランドセルの後ろ姿が脳裏に浮かんで僕を責め苛んで、僕はそれに対して呻き声を上げながら誰にもなく怒りを覚えるしかなくて、誰にもなく言い訳をしながら僕は、とつくに手遅れになってから校舎裏に行ったりやり場のない気持ちをどこかにやってしまいたくて、僕は土埃だらけの地面を這い蹲った。少し葉の尖った茂みに手を突っ込んだ。茂みを手で掻き回している間は都合の悪いことを忘れていられたから、しばらく自分の気持ちを晴らせる動作を続けていたとき、偶然にも、茂みの葉とは少し違う、ひんやりとしたものに指先が当たった。

掴んだ手にすっぽりと収まっていたのは、確か当時流行っていたアニメ顔のネコだった。人語を話したりどこかに走り去ったりしない、キーホルダーだった。不思議なくらいの気ぶりだけは覚えがある。宮崎が持っていたものだった。どうやらそのキーホルダーが校舎裏に落とされていたらしい。校舎裏、理科室脇の錆

びた貯水タンクを囲む狭い空き地で僕は途方に暮れていた。そして、その間が致命的だった。しばらく躊躇した後、落し物を拾った善良な一児童として職員室に向かおうとした僕の前に、「おい」と低い声の人影が現れた。白河の取り巻きにいたようなやつだった。

「何してんだよ、手無し」

「……そっちこそ」

開口一番失礼極まりない同級生と睨み合った。やり場のなかった怒りの矛先がうまい具合にそいつに逸れた。うまいだけでいいことなんて何一つないことではあったのだけど。そして白河の友人は、「手の中のもの出せよ」という古典的な（たぶん何かの漫画を参考にしたんだろうな、というような）フレーズで、精一杯悪役を気取って（そういう年頃だったのだろう）、自分が僕に声をかけた理由を教えてくれた。

しかし、僕も負けていなかった。

「それって、白河がやれって言ったのか？」

だったら僕にとっては好都合な展開だった。そんなやつ忘れて僕の所へ来いよ、宮崎。みたいなセリフをほざくことができるかも知れない、そんな期待をした卑小な僕なのだった。

「まさか。言うわけねえだろ。白河に謝れ。あいつが周りを気にしないから、俺がやるんだ。宮崎菌がいたらどうすんだ」

そこで理性が飛ばなかった理由が、今でもわからない。大人しいやつを取り巻きには荒っぽいやつが多いのは昔から、少なくともこの頃には、お約束だったらしい。まったく、見た目は完全にガキ大将（死語）じゃないか。

誰かにグーで殴られたのは、それが初めてだった。口の中が嬉しくもなんともない出血大サーブスで、ふざけてナイフを舐めていた幼少期を思い出させるものだった。強打に慣れていなかった視界は揺れに揺れて、頭痛と吐き気がぐわんぐわんぐるぐる。殴られた頬が痺れて、熱くなっている。その熱さに妙な予感があった。触った頬は普通に僕の体の一部で、むしろそれを確かめようと触った左手の方が指一本分の隙間が寒くてならなかった。

「……何か言えよ、気持ち悪い」

ずっと頬を触っていた僕に向けられた言葉。

「ま、いいや。どうせいつまでも隠し通さなきゃいけないもんでもないし。でも」

そう言って白河の友人（ではなく秘書と呼びたいところだ）は溜息を吐きながら「そのままじゃ宮崎みたいになるぞ」と不吉め

いたニュアンスのことを呟きながら夕陽の眩しい校門方面に立ち去っていった。それに対して僕はきつと、少しだけにやっとして手を振ったと思う。挑発しようとかそういうことではなく、ただの余裕アピール。

宮崎みたいにい？ 無視されたり、教科書がいつのまにか勝手に忘れ物になっていたり、給食がもはや食べ物でなくなっていたり。それがどうした。僕は宮崎と同じになることなんて、何でもないからな。むしろ狂喜乱舞だぜ、ぐはは——みたいなことを思ってみただろうか。どころか下手をすると実際に言ってみた恐れもある。完全な黒歴史だった。

何故なら、実際次の日が来てみたら僕は怯えに怯えて、クラスの空気に対して過敏に反応していた。放課後、校舎裏に向かって行く赤いランドセルの後ろ姿を、さりげなさを装って見つめながらも周りと同じように校門に向かい、家路についていた。何やってんだ僕、なんて十年も生きていれば慣れてしまう叱咤では僕の心は動かしても体までは動かさなかった。僕はあんな脅し文句にびびってないびびってないからなびびってないんだぞ僕は本気で本気の本気なのに何で宮崎はあんなことになっていて僕は何でいつも通りそんな宮崎の姿を眺めてるだけなんだほら宮崎がまた困

ってるじゃないか校舎裏にたった一人で行ったぞ戻れ戻れ戻れ戻れ戻れ。頼むから。

あの日まで、戻ってくれ。

その後何度もすることになる願ひ事は、家に着くまで、いやベツドで寝るまで止まらなかった。体はあっさり家の前で止まっていた。

次の日から、しばらく僕は学校を休んだ。

別に精神的なものではなく、冷え切った部屋で毛布をかけずに転寝したせいでひどい風邪をひいてしまったのだ。朝の時点で起きられないくらい頭が重くて、朝食が胃袋から閉め出されることになった。ご存知僕の状態に過敏になってしまった家族の手で連れて行かれた病院の先生に、「よく起きられましたね〜」と暢気に褒められたことに少し腹が立ったのを覚えている。そんなわけではしばらくの間、ほぼ絶対安静みたいな感じになって自室のベッドで寝て過ごした。

思ったより長引いた風邪のせいで役半月ぶりになってしまった学校は、ほぼいつも通りだった。僕に向けられる視線は少し冷たくて、窓際の列前から三つ目にあった宮崎の机には胸糞悪くなるような落書きがあつて、周りには宮崎の反応を窺うように待ち構

えているクラスメイトの姿があつて。ほぼいつも通り。だけど宮崎の姿だけがそのいつも通りになりかけの教室にはなかつた。それだけがいつもと違うところで、予鈴が鳴つても宮崎は来なかつた。そしていよいよ担任が来るというところで片付けを始めたクラスメイトたちは、立ち歩きを叱られていた。これだけである程度気持ちがすつとした自分への嫌悪でどうにかなりそうだった。

宮崎は体調を崩したらしい、と簡単に告げた後、担任は普通に授業を始めた。体調不良の真実について、きつと二学期末の学年集会で僕と宮崎を名指しして晒し者にしたこの無神経教師には察せられないのだろう、と僕は思った。しかしどうなのだろう、今となつてはわからないけど、きつと彼は僕らの間の事情についてわかつていたのではないだろうか。だからといって彼を許せるわけもない。当時の六年三組の担任教師は僕らを晒すだけ晒して見捨ててしまったのだから。……その恨み言を僕が思いつくのはそれからだいぶ経つた頃のこと、その日はただ、担任の妙にホクロの多い顔を眺めているだけだった。

帰りの会が終わつて、配られた手紙を宮崎宅に持つていくことになつたのは僕だった。宮崎の持ち物には簡単に触れるのに宮崎本人には全く触れたがらないクラスの顔ぶれと、よく一緒に

される僕の扱いを思えば、その役目が僕に回るのも仕方ないことだとも言えた。

歩いてみてわかつたけど、あの雨の日、僕は宮崎を送つたつもりだったけど別れた場所は宮崎の家から遠かつたのだということだった。僕らが別れた場所には、まだ咲きそうにない桜並木があつて、それを通り過ぎると明治時代から残っていると聞いてその辺り唯一の観光資源になっている屋敷があつた。社会の授業で習つたところによると、鹿鳴館華やかなりし頃にその洋館にそこそこ権威のある学者が住んでいたらしい。今度宮崎と来てみたい、なんて暢気なことを考えていた。僕は、全く自分が置かれてある立場についてわかつていなかった。わかつているつもりで、全然自分の周りのことをわかつていなかったのだ。

洋館のことも次の瞬間には忘れて、以前場所だけ聞いて行つたことのなかつた宮崎の家を目指した。ブランコと砂場と大銀杏が寂しげな公園を通り過ぎてから四、五分歩いたところに、宮崎宅はあつた。目立つから遠くからでも見つけられた、ということはもちろんなくて、事前に場所を聞いてなければ見つけられなかつたような、一般的すぎる民家だった。特徴となるような部分は一切ないながらも新しさを窺える家で、傾き始めた日光を浴びる白

い壁が綺麗だった。インターホンを押すのに躊躇して、押しかけらも人が出てくるまで色々な思春期妄想をして苦しんだ。宮崎の顔をまともに見られるのか不安で、帰りたいたいも思ったけど、そう思った瞬間に、ドアが開いた。

長く感じたけど、きっと数秒だったのだろう。ドアを開けて出てきたのは宮崎本人だった。慌ただしく玄関先に出てきた宮崎は体調不良というには元気そうで、ぼかんとした目で僕を見ているその顔に僕は、場違いにも照れまくった。そんな勘違い少年は目の前の想い人に何を言おうか散々迷った挙句に「だ、大丈夫、なのか？」とかいうか細い声を出すのが精一杯だった。「うん、大丈夫だけど？」とあっさり答えた宮崎に、風邪のことを心配されてしまう僕だった。

「ていうか体調不良なんかじゃないし。ちよつと気が向かなくてサボっちゃったんだ」

サボっちゃった、というその笑顔が余りに眩しくて、僕はその内容の深刻さから簡単に目を背けられてしまった。

「そ、そうなのかー、サボリなのかー、み、」

だからといって『みんな心配してたぞ』なんて言葉を口走るほど僕の舌も多くない。それで宮崎にプリントを渡して帰ろうとし

たところだったろうか、宮崎が「ちよつとその公園に行かない？」と僕を呼び止めたのは。暇だったからなのか、呼び止めた相手が宮崎だったからなのかは明白だけど、僕はその後宮崎が何をしようとしているのかとかそういうことは何も考えず、ただ浮かれて二つ返事をしたのだった。

そうして何一つ心の準備なんてないまま、僕は宮崎につれられて、数分前くらいに通った公園に着いた。やはり物寂しいその公園の大銀杏の下にあるベンチに、二人並んで座った。何てことのない話をして、それで笑ったりして、僕は大満足だった。役得だとか思ったのかも知れない。僕の顔は、消防士も冷やかしながらさじを投げるほどの大火災中だった。何故それを覚えているかといえ、それと直後の会話のギャップがあまりに激しかったからに他ならないのだけど。

「佐波……」何かに耐えかねたように宮崎が話を切ったのが始まりだった。

「な、なに」

「わたしさ、来月引越すから」

瞬間、世界から音が消えた。それがたまたま本当に音が消えただけなのか、僕の脳内配線が焼け野原になったからなのかはわか

らない。宮崎の声だけが僕の耳には届いていて、体に満ち溢れたゼロ・デリカシー（と言ってみたら多少かつこよくなりそうだったけど余計惨めだ）を、まさしく遺憾なことに、遺憾なく発揮したのだった。

「ど、どうして……」

思い出す度つくづく嫌気が差す。理由なんてわかりきっていたじゃないか。だけど無神経だった僕は、更に言葉を重ねて、取り返しもつかないような状況になってからでないとそのことを理解できなかった。

「え、何が、な、何で？ そんな急に言われてもさ。ちよ、何でだよ。だつてこないだ、中学校の話とかしてたじゃんか、なあ、何でそんな、」

「……っさいな」

「え？」

それが宮崎の声だと気付いたのは、二回目と同じことを言われてからだだった。そうやって聞き返した声も、彼女の癪に障っていたらしい。次に宮崎が僕に向けた言葉と表情には、その後の人生でもあまり向けられなかった嫌悪が滲んでいた。

「うっさいって言ってるの！ ていうか、大体誰のせいでこんな

ことになったかわかってねえのかよ！ あのさ、佐波ってたまにすっごいウザいのわかってる!？」 『どうして?』 『何で?』 そんなの佐波の指のせいに決まってんじゃない！ 『何で?』なんて、そんなのわたしの方がよっぽど聞きたいんだよ！」

初めて聞いた宮崎の怒声は、僕の頭を真っ白にした。

「何だよそれ、じゃあ何であんな遊び思いついたんだよ！ あんなことしなければ」佐波だって止めなかったじゃん！ むしろノリノリで乗ってきたくせに何言って「人の指切っ」といって何言ってるんだよ僕だってあれからずっと辛くて」「わたしだって辛いし！ 友達はいなくなるし教科書切られるし服トイレに入れられるし履き燃やされるし」「……」「給食に唾とか変なの入れられるしロッカーに泥水まかれるしランドセルに何かの内臓入れられるし取られたハンカチが生臭くなつて返ってきて捨てたしコラ画像ネットに上げられるし人殺しとか言われて歩いてると石投げられるし」「やめろよ」「知ってる？ 朝起きると隠し撮り写真が郵便ポストに入ってるんだよ？ だから最近はずっとわたしが新聞とか取ってるんだ。それに昨日なんて白河くんの前で『昨日は誰を殺したの?』とか言われたんだけど。部屋の窓ガラスも割られるし靴に仔ネコの死体ねじ込まれるし携帯取られて出会い系に登録さ

れて、」

「やめてくれよっ!!」

そこまで聞いて僕の心は折れた。もう彼女に怒りなんてなかった。同情すらできない、ただただ怖かった。宮崎を見ることで感じ取れてしまう彼女の日常の気配に、僕はすっかり怖気づいていった。無駄な抵抗とわかりながらも呟いた「いや、でも、僕だって」という言葉を宮崎が引き取ってくれることはなかった。

許して。許して下さい。すいません。ごめんなさい。

そう言おうとして開いた口は、無駄に二酸化炭素を排出してまた閉じた。声帯がすっかり職務放棄していた。ついでに連合野も全体的に一時停止していたので、気の利いた言葉も言えなかった。そのまま何も言わずにどこかへ、きつと自宅へ、走り去ってしまった宮崎に、僕は何か言うべきだったのだろうか。傷つけていたことに一切気付かずにいた僕は。僕が悪かったんだとか、ごめんとか、待ってくれとか。でも実際に僕が口から出すことができたのは、「——あ、」という掠れた音だけだった。

八つ当たりも謝罪もできなくて、ただ自己嫌悪の念だけを残されて、僕は立ち尽くしていた。

僕の記憶が正しければ、それから卒業式までの一カ月半くらいの間、宮崎は一度も学校に来なかった。手紙が配られる度に僕は宮崎宅に行くことになったのだが、実際僕が行けたのは絶対に提出しなければならぬ重要な書類が配られた一、二回だけだ。

そのうちのどちらか、たぶん一回目の方だろう、宮崎のお母さんに鉢合わせたことがある。そのときに感じた気まずそうな視線と、「わざわざありがとうね」と言って手渡された『お小遣い』の額からは、宮崎家の僕に対する拒絶の意志を感じた。

宮崎のいない学校で、僕は卒業まで鬱々と過ごした。

きつと後悔するとわかっているけど、僕には宮崎に会いに行く勇氣がなかった。自分たちのしたことをすっかり忘れたみたいの話しかけてくる佐藤や野崎とは、この辺りで疎遠になった。しかしさすがは空気を読む達人、僕の心中も早々に察してくれて、数日後には全く話しかけてこなくなった。挨拶以外は黙って過ごす、なんて日も珍しくなくなっていた。

空虚で退屈な学校生活はあっという間に残り僅かとなって、卒業式二日前の夕方。僕は忘れ物に気付いて学校に戻った。

もう、少しずつ私物を持ち帰らなくてはいけない時期だった。教室の中もかなり品薄状態、殺風景な空間にがらんだような机がい

くつも並んで影を落とす光景は、なるほど確かに怪談話の舞台になりうるだろう雰囲気があった。恐る恐る歩いて机に置き忘れた筆箱をランドセルに詰めて、帰ろうかと思つたところであつた。ふとあることが氣になつて僕は足を止めた。

エゴが親切のふりをした瞬間だつた。姑息な僕は、もう先日のことなんて氣にしませんよという態度で宮崎の家に向かつた。

さすがに全部一度に持ち帰ることはできず、まずは手軽な体育館履きを持つて宮崎宅のインターホンを鳴らした。出て来た宮崎の背後には、段ボール箱がいくつか見えた。宮崎家は三日後に引越しを控えていたのだ。僕の顔を見て氣まずそうに———「それどころかドアを閉めようとまでしていた宮崎は、僕の手にあるものを見て今度は驚いた顔をした。今思うとその顔は、もつと別の種類の表情だつたのかも知れないけど、それについては考えたくない。その後僕らは二人で、学校に残つた私物を持ち帰つた———といつても残つていたものは僅かだつただけだ。机から私物を取り出す度に浮かべる宮崎の強張つた顔を見るのが辛くて、僕はありもしないロッカーの荷物を探していた。

帰り道はもう真つ暗で、少し遠めの感覚に設置された水銀灯の頼りない光が転々と続く通学路を二人で歩いた。

「まだ暗くなるの早いな」

「……うん」

会話が續かないのは仕方ないことだつた。色々話を振るなんて芸当が僕にできたとは思えない。きつと氣まずい空気をずっと引き連れていたのだろう。でもそこで「何話そう」とか考えている間は、僕の指に注がれる好奇の目も、それを嫌つて指を見せない僕への恨みがましい視線も、以前より強くなつてしまつた両親の干渉も、無いはずの指から伝わる痛みも、考えずにいられた。

逆にそれでも考えずにいられたのは宮崎がもうすぐいなくなるのと、そして何と白河が宮崎宅を訪れていたことだつた。

どんなに周りが氣を回しても、空気を作る側の特権の代償に空氣を読めなかつたらしい白河はその持ち前の親切心（僕のような姑息な欺瞞ではなく本物だつた）に従うままに、ずっと休んでいる同年年の女子を見舞つたわけである。彼本人にとつてはそれだけでも、宮崎にとつてはこの世の春、と呼んでいいくらい嬉しいことだつたらしいし、僕にとつてはそれこそ体全体がバラバラになりそうな出来事だつたに違いない。

どうにかしたいけど、どうにかできないことではないのは僕にもわかつていた。最近何かあつた、という僕の問いの答えとして話

された白河のお見舞いエピソードは、別れ際まで続いた。

白河への恋心が伝わりすぎて、胸を刺されるような気持ちだったのだろう。今でも腹の底から苦い何かが上がってくる。

だから公園での別れ際、僕は自分の胸からせりあがって喉をひくつかせる妙なブレッシャーに後押しされて、限界を迎えた。

「宮崎、僕さ」

「ごめん」

きっとそんな終わりだったのだと思う。僕は最後まで言うことすらできなかった。完膚なきまでにふられた。それどころか告白を拒否してしまった。だから僕は、嘘八百並べたてて気持ち良く宮崎を見送るだけだった。その帰り道で、僕は初めて水銀灯の無機質な白光に温かみを感じた。

そして迎えた卒業式翌日。宮崎は遠くへ引っ越した。

「わたしのこと、忘れないでね」と宮崎は言った。相手はもちろん「わかった」と朗らかな返事だった。手紙がどうか言っていたらどうか。さすがは白河、僕だったら「あ、ああ」と言うだけ、そんなことを思いつかなかっただろう。というか思いつかなさそう。さすが、あの頃の白河は今の僕よりも立派なやつだったのだろうか。まあ、僕は宮崎から言葉をもらっていないのだから、

この『あ、ああ』は単なるifでしかないのだけど。

だから結局、僕が最後に宮崎から聞いたのは白河が来てくれて嬉しかったという話と、『ごめん』という拒絶の言葉だけで。

その後、僕の左薬指跡には代わりの指が付けられた。だいぶ高かったらしいことを後から知った。宮崎の温度に触れていた唯一の名残は、こうして塞がれた。結局、今残っている僕は、ついで宮崎に触れていなかったのである。

そして今、生まれ育っていない上京先で、生まれ持っていない左薬指ともそろそろ十年の付き合いになるろうとしている僕の横で白河は相変わらず眩しい。あー、どうせなら宮崎と会いたかったけど、人生そうフィクションみたいにいらない。

とても僕には直視できない世界にいるらしい白河は、同時に、僕らにとってはどうしようもなく懂れずいられない存在なのかも知れない——なんて言って、僕と宮崎を同じカテゴリーに入れてみたり、過去に彼女がしていた恋を否定してみたりするのも何だか空しく、僕はようやく、返事と相槌以外の言葉を白河に向けた。

「なあ白河。宮崎ゆきって覚えてるか？」

「ああ。小学校同じだったよね。どうかしたの？」

さすがは白河というべき即答だ。しかし、どうしてたか聞いたのは僕の方だ。

何故なら、お前なら僕が知らない宮崎のその後を知っているはずなのだから。

「いや、確かあいつ引越しただろ？」

確かどころじゃない。僕には未だに彼女がつけた傷がくつきり残っている。白河はまだ僕の聞きたいことがわかっていないらしく、「うん……？」と曖昧な表情で頷いている。

そのタイミングを計ったみたいな察しの悪さに少しだけイラッとしながら、僕はとうとう「手紙とか、出してなかったのか？」と聞いてみた。

「手紙か……」

その反応は、予想だにしないものだった。白河の表情が、少しだけ変わった。だからといって、引き下がるうとは思わない。むしろ、その内容を聞かすにはいられない。僕の知らない宮崎の姿を知りたい。小学生の頃ですら抑えられた気持ち止まってくれない。彼女がああ後どんな毎日を過ごしていたのか。幸せだったのか、辛かったのか、聞いても仕方がないことはわかっている、聞いておきたかった。も、聞いておきたかった。

「宮崎は、あいつは、どんなやつだったんだ？」

お前しか知らないんだ、彼女が恋する相手の前でどんな風だったのかを。唯一心を許していたであろうお前にだけ、彼女は言っていたことがあるはずなんだ。

思わず詰め寄りかけたとき、間の悪いことに診察室から僕の名前を呼ぶ低く野太い声が聞こえてきた。何だよ、こんな時に。とは言えずに診察を終えたとき、白河はもういなかった。そっか、後は葉待ちって言ってたっけか。ソファアに向かって尻から乱暴に落下する。少し黄ばんだ白天井を見上げながら、僕はぼんやりと考えた。

………君は、どこかで幸せになっていますか？

偶然の再会を経て恋愛へ——なんてのも夢見たけど、やっぱり一番は宮崎が幸せになっていることだ。

僕を傷つけた少女が。

僕が傷つけた少女が。

どこかで幸せそうにしているなら、きっと僕の痛みも少しは癒されるような気がした。さっき白河が見せた表情を見るに、どう

やら文通の終わり際はいいものではなかったみたいだ。そう思うと、聞かないでよかったのかもな。

ただ人の幸せを夢想することに慣れていない僕は、少々暇を持って余すことになってしまう。仕方ないから、さつき読み始めた雑誌を開いて短編を読み始めた。……うわ、いきなり恋人が死ぬるんだけど。やっぱりやめとこうかな。そう思っていたら、認めたくはないけど聞き覚えのある名前が聞こえる。

「佐波幸多さん！」

名前負けにもほどがある僕の名前だ。素直に立ち上がるのも癪だったから、「しよーりゅーはー」と言いながら立ち上がる。技にならないのは織り込み済み。受付の人からも変な目で見られてしまった。内科より精神科を勧めたい、と目が言っている。失礼な人だ。僕のどこがそう見える？

とはいっても、何となく気恥かしくしてお釣りと領収書を急いで受け取って、下駄箱でスリッパを脱ぐ。

結局のところ僕は——今ここにいる僕は、彼女との接点を一切持たないままであることを宿命づけられているらしい。海馬に遭された錯覚じみた記憶を抛り所にして、僕は今日もまた、あの狭苦しい遊び場と、どこにも残っていない感触と温度の面影で心を

満たして——

「あ」

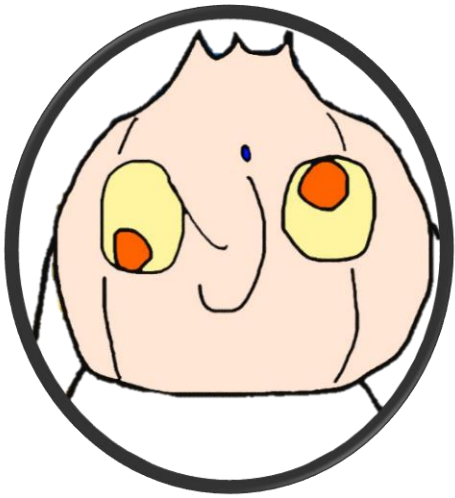
「あっ」

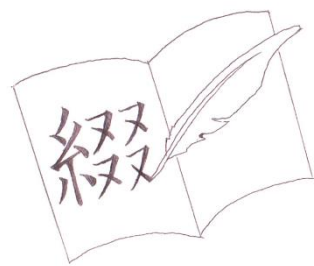
連続回避本能に付き物のトラブルを経てすれ違い、僕は病院の正面玄関を出る。数歩歩いてから振り返ると、もうその女性は受付に向かっていている。どうやら僕は、久々に会ったくらいじゃ思い出さずに済むやつになれていたらしい。思わず頬が緩む。まったく、人の指はこんなにしといて、自分の指には綺麗なの付けてんじゃない。誰にも聞こえない軽口。

僕は、幸せそうな人妻になった初恋の人とすれ違った。

見上げた空はよく晴れている。何だか本当に小旅行の一つにでも言ってしまったような気分だ。

まずはどこへ行こう。僕は、少し笑いながら考えた。





編集後記に代えて

お風呂屋さんに行きたい——わたしたちの秋は、或る人物、特に誰とは言いませんが、会長のこのような一言から始まりました。お風呂、泡、うたかた、現れたかと思えばたちまち消えてしまう、あの泡沫のように、わたしたちは、果たして何処に在るのかわからない儂い憧憬を目指すのです。会長はそのようなことを仄めかしていたのです。在り得ない場所、即ち想像上の、さまざまな在り方を秘めた可能的世界、秋の夜長のソーブランド……

八年という短い生涯を、実り多い人生を生きて、ajo 君は死にました。2013 年のことです。夭折した ajo 君を悼んで、会長は述べたのです。ajo 君もまた泡のようだったのです。会長は彼を思い出すために泡にまみれようと考えたのです。会長は、夜空の下、屋上から叫びました——貯金おろしてくればよかった。結局、会長はお風呂屋さんへは行けませんでした。ajo 君の身体を抱き締めることは叶わなかったのです。ajo 君は死んだのですから……

そんなことはどうだっていいのですが、今回の冊子はいかがでしたか？ 今年度は、何の宣伝もしていないのにもかかわらず、新入部員が一人ではありますが、入会してくれました。縮小傾向にある我がサークルですが、最近、ダウンシフターだのスローライフだのが流行ってるからいいんじゃないですか。あと、量より質ですからね、うんうん。

追記 なんかサークルの名前が「ajo」から「綴」に変わりました。蕎麦屋みたいな名前ですね。

特別寄稿 ajo 君を守る会々長 阿保田蕪夫

“綴” 2014 秋冊子

2014 年 11 月 1 日発行

印
発

刷
行

共信印刷株式会社

東洋大学文芸サークル “綴”

わたしたちは常に新入会員を募集しております。お気軽にお尋ねください。小説・評論・詩歌・ノンフィクションなどジャンルは問いません。特に、井上陽水のモノマネが得意な人を歓迎いたします。

Mail : bungei_ajo@hotmail.co.jp

Blog : <http://bungeiajo.blog14.fc2.com/>

Twitter : @bungeiajo

(上記の連絡先は旧サークルのものを引き続き利用しております)



*Toyo Universsity
Literary Circle "Tuduri"
presents.*

In the night sky,
we'll find ourselves
arising stars.